

ポートフォリオ

平野 真美

平野 真美

Mami Hirano

<経歴>

- 2014 東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 先端藝術表現専攻 修了
2012 名古屋造形大学 造形学部 造形学科 情報デザインコース 卒業

<活動歴>

個展

- 2024 平野真美 個展 変身物語 METAMORPHOSES (Maki Fine Arts / 東京)
2023 平野真美 個展 架空のテクスチャー (WHITEHOUSE ナオナカムラ / 東京)
平野真美 個展 空想のレッスン (Maki Fine Arts / 東京)
2021 3331 GALLERY #041 3331 ART FAIR recommended artists 平野真美 個展
変身物語 METAMORPHOSES (3331 Arts Chiyoda / 東京)
2018 アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校 (岐阜県立岐阜盲学校)
平野真美 個展 蘇生するユニコーン (ギャラリーマルヒ / 東京)

グループ展

- 2024 南飛騨 Art Discovery (岐阜県下呂市萩原町一帯)
2023 都市にひそむミエナイモノ展 Invisibles in the Neo City (SusHi Tech Square Space / 東京)
2021 Collectors' Collective Vol.5 (biscuit gallery / 東京)
2021 ab-sence/ac-cept 不在の観測 (岐阜県美術館 / 岐阜)
2019 セカンド・フラッシュ (岐阜県美術館 / 岐阜)
2019 メディアコスモス新春美術館2019 (メディアコスモス / 岐阜)
2018 アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校 成果発表 (岐阜県美術館 / 岐阜)
2018 2018年のフランケンシュタイン -バイオアートにみる芸術と科学と社会のいま (EYE OF GYRE / 東京)
2017 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 (岐阜県美術館 / 岐阜)
2015 大名古屋電腦博覧会2015 (名古屋市民ギャラリー矢田 / 愛知)
2015 REN-CON ART PROJECT -連繋する現代アート- (名古屋芸術創造センター / 愛知)
2014 若手作家刺激プログラム motion#2 (名古屋市民ギャラリー矢田 / 愛知)
2014 黄金町バザール2014 (黄金町サテライトスタジオ / 神奈川)
2014 トーキョーワンダーウォール公募2014 入選作品展 (東京都現代美術館 / 東京)
2014 アタミアートウィーク2014 (nagisART / 静岡)
2014 東京藝術大学卒業 / 修了作品展 (東京藝術大学大学美術館 / 東京)

レジデンス

- 2018 アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校 (岐阜県立岐阜盲学校 / 岐阜)

ワークショップ

- 2021 ナンヤローネットワークショップ「持ち主不在の聖書」(岐阜県美術館 / 岐阜)
2019 ナンヤローネットワークショップ「信頼できない語り手」(岐阜県美術館 / 岐阜)
2018 ナンヤローネットワークショップ「蘇生するユニコーンと物語る」(岐阜県美術館 / 岐阜)

受賞

- 2020 3331 ART FAIR 2020 川村文化芸術振興財団賞 受賞
2020 3331 ART FAIR 2020 レコメンダーアーティスト賞 受賞
2017 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 入選
2014 トーキョーワンダーウォール公募2014 入選

蘇生するユニコーン

2014年から現在までの作品記録



蘇生するユニコーン *Rivive a Unicorn*
2014 -
樹脂、シリコン、毛、電動ポンプ、エアークンプレッサー他
1650×1380×500 (mm)

蘇生するユニコーン 部分







Tooru Tsuji

蘇生するユニコーン

非実在生物であるユニコーンの、骨格・内臓・筋肉・皮膚など身体を構成するあらゆる部位を制作する。制作した内臓を肋骨で覆い、骨格に筋肉を被せ、血管を張り巡らせて皮膚を縫合する。そうして架空の生物であるユニコーンを実在させる。

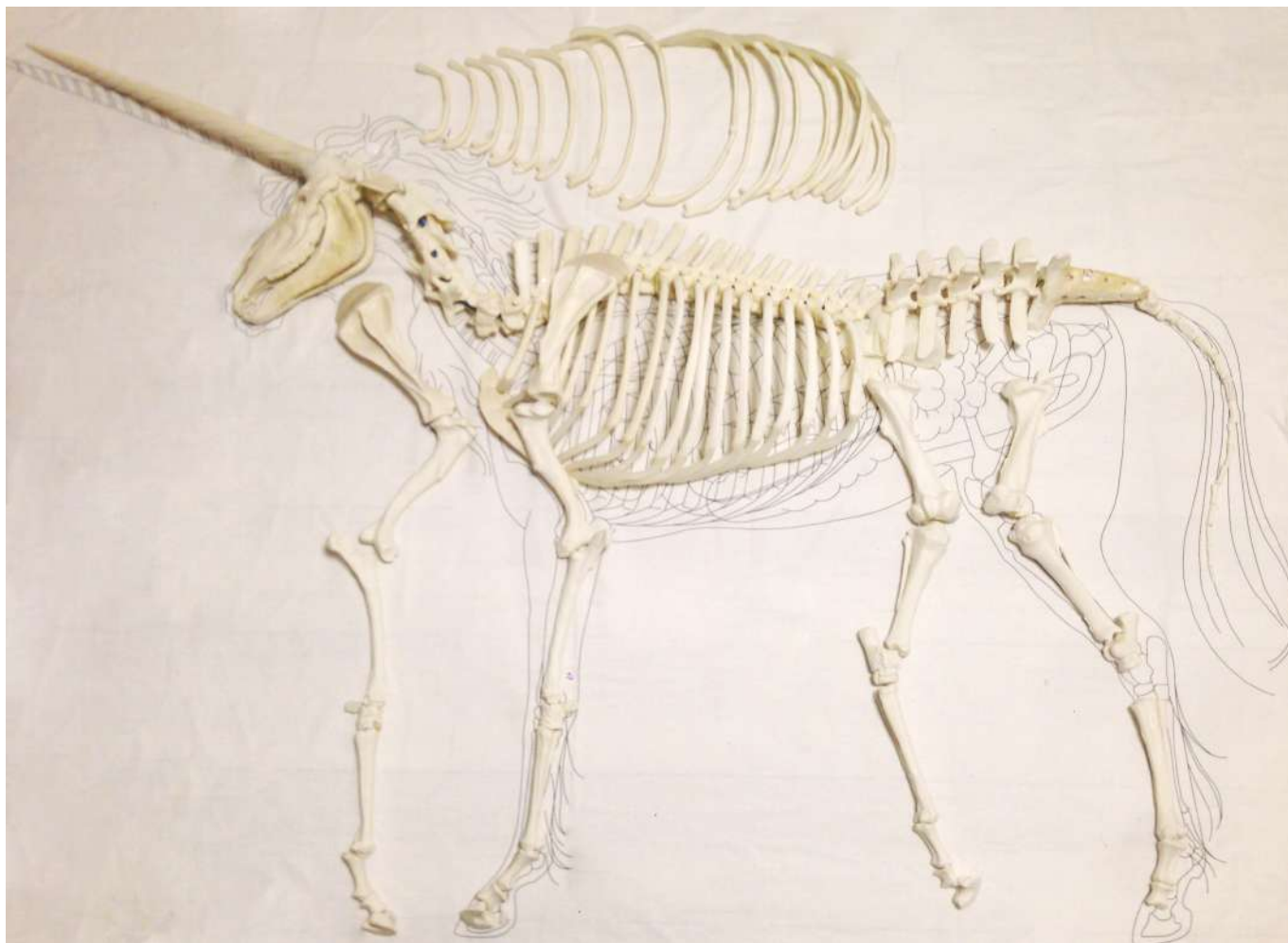
制作したユニコーン体内の心臓と肺に生命維持装置をつなぐ。肺に空気を送り、心臓と血管に液体を流し、呼吸と血液循環を行うことでユニコーンを蘇生する。

幼い頃実在すると信じていた架空の生物は、今は実在しないと分かっている。存在を否定されたその生物は、現実世界で居場所を失い人々の脳内で息絶え屍となって横たわっている。私は出来る限りの制作を行い、純真さの象徴であるユニコーンを自らの手で実在させ、心臓に血を流し肺に空気を送り息を吹き返させる。それは私達が気付かぬうちに失った夢や希望・幻想を蘇生させる瞬間である。

蘇生するユニコーン 骨格 (2014~2017)



蘇生するユニコーン 制作中の様子 (全身の骨格)



蘇生するユニコーン 制作中の様子 (頭骨、内臓、植毛中の様子)



蘇生するユニコーン 設計図 骨格系 (2022)



蘇生するユニコーン 設計図 内臓系 (2022)

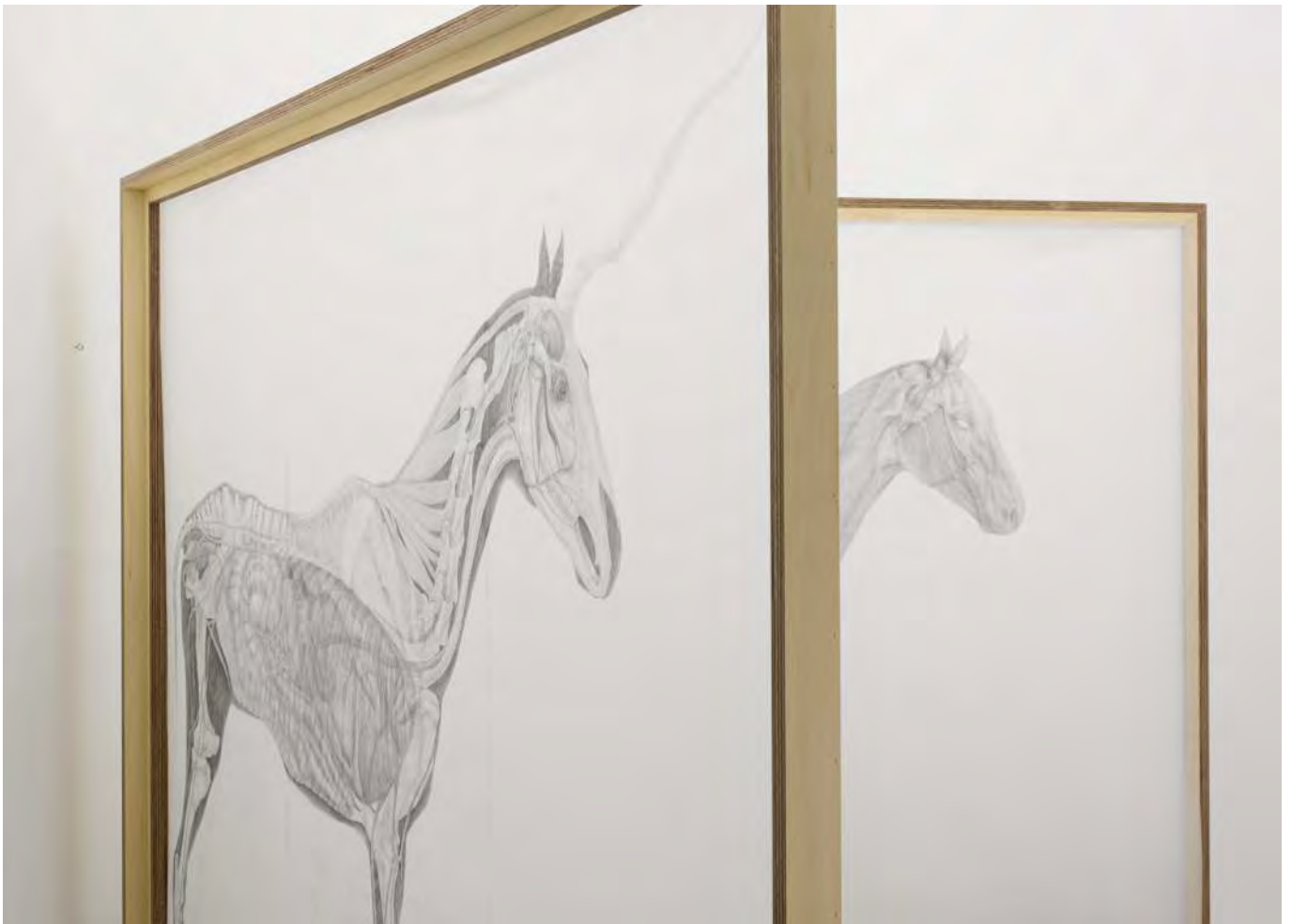


蘇生するユニコーン 設計図 筋肉系 (2022)



蘇生するユニコーン 設計図 表皮 (2022)





変身物語 METAMORPHOSES

2018年から現在までの作品記録



変身物語 METAMORPHOSES #1 X-ray film 1

2018

レントゲンフィルム

サイズ可変

変身物語

METAMORPHOSES

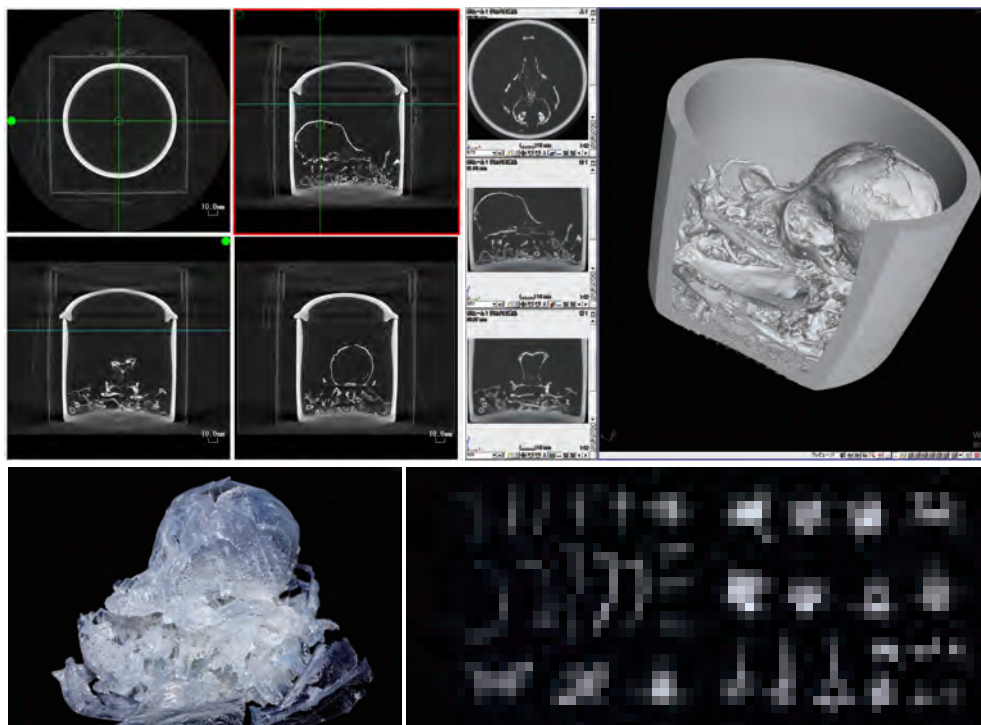
5年間の闘病の末 2015年に亡くなった愛犬の遺骨は、火葬ののち納骨せず、未だ実家の居間に置いてある。火葬の時家族と触れたあの小さく美しい遺骨をもう一度見たいが、骨壺の中には辛くも幸せだったあの時間の空気が詰まっているようで、骨壺の蓋を開けることはできなかった。開けてしまえば、あの時間を失って二度と戻れないだろう。

私はある日、父母の了承を得て、骨壺が入った骨箱ごとCTスキャンを撮ることにした。スキャンデータを元に遺骨の3Dデータを作成し、3Dプリンタで出力する。出力した樹脂製の遺骨を型取りし、様々な素材に変換する。例えば石膏で型取りしガラスに置き換える。例えば鋳込み成形した陶器製の遺骨を、一つひとつの骨を元の身体の通りに継ぐように、骨同士を金継ぎする。

その記憶も何もかも、死を境に失うものばかりだった死者に纏わる一切が、これを機に増幅していく。様々な素材に触れ美しさをそのままに変容する姿を見て、私は私自身の変化を受容できるだろう。

現代の葬制は死を日常生活から遠ざけ、やがて死者は社会に実在しなくなった。重い墓石のなか、骨壺のなかに覆い隠されてしまった死者を、私の葬法で繰り返し変身させ、私は死者を失わない。その変身の過程を見せる物語である。

▼2018年10月3日撮影



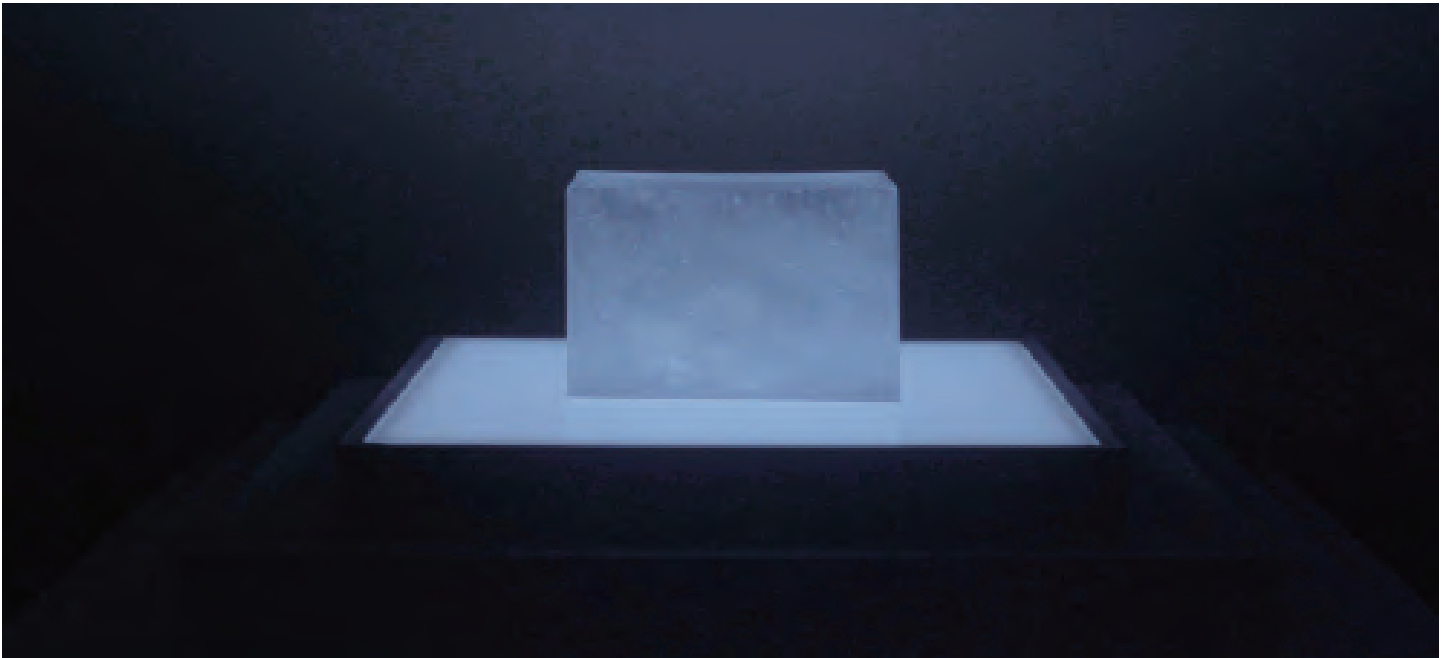
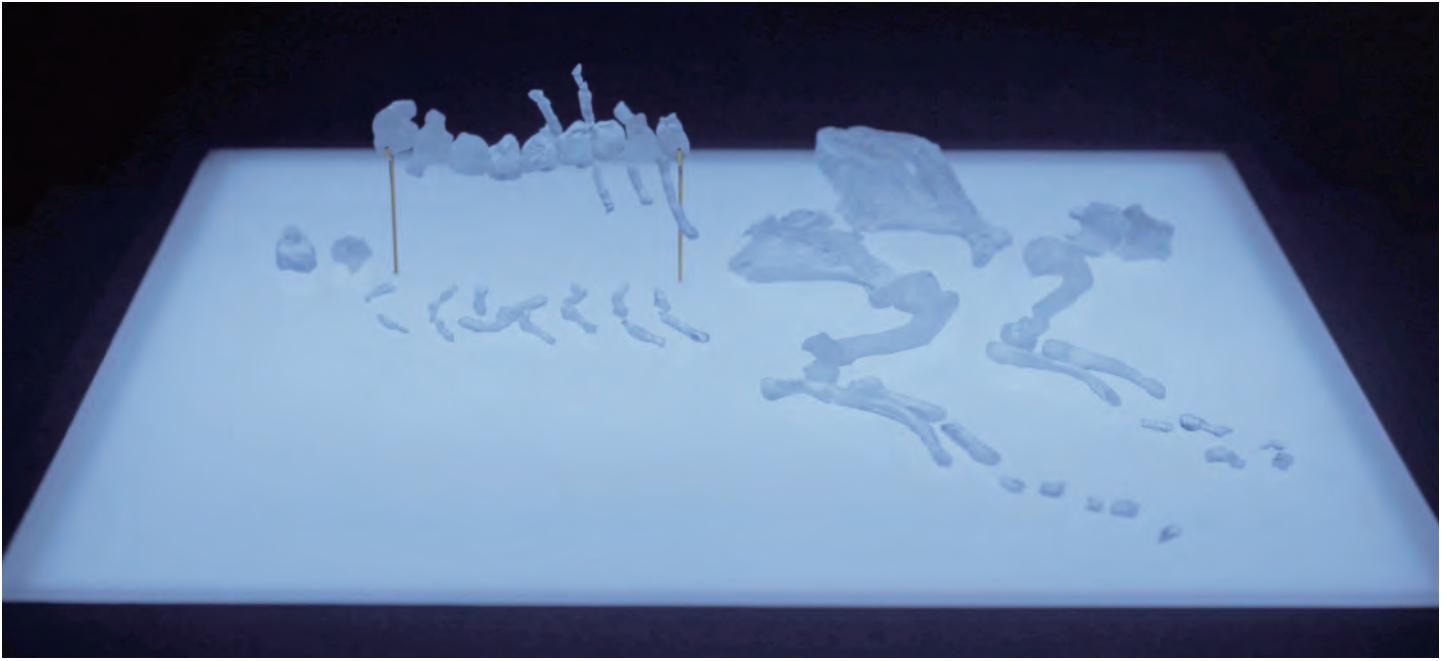
▲2019年7月12日出力

平野 真美

<会場の様子>



<会場の様子>





変身物語 METAMORPHOSES #1 X-ray film 2

2021

レントゲンフィルム、シャウカステン

310×260×56(mm)



変身物語 METAMORPHOSES #1 X-ray film 6

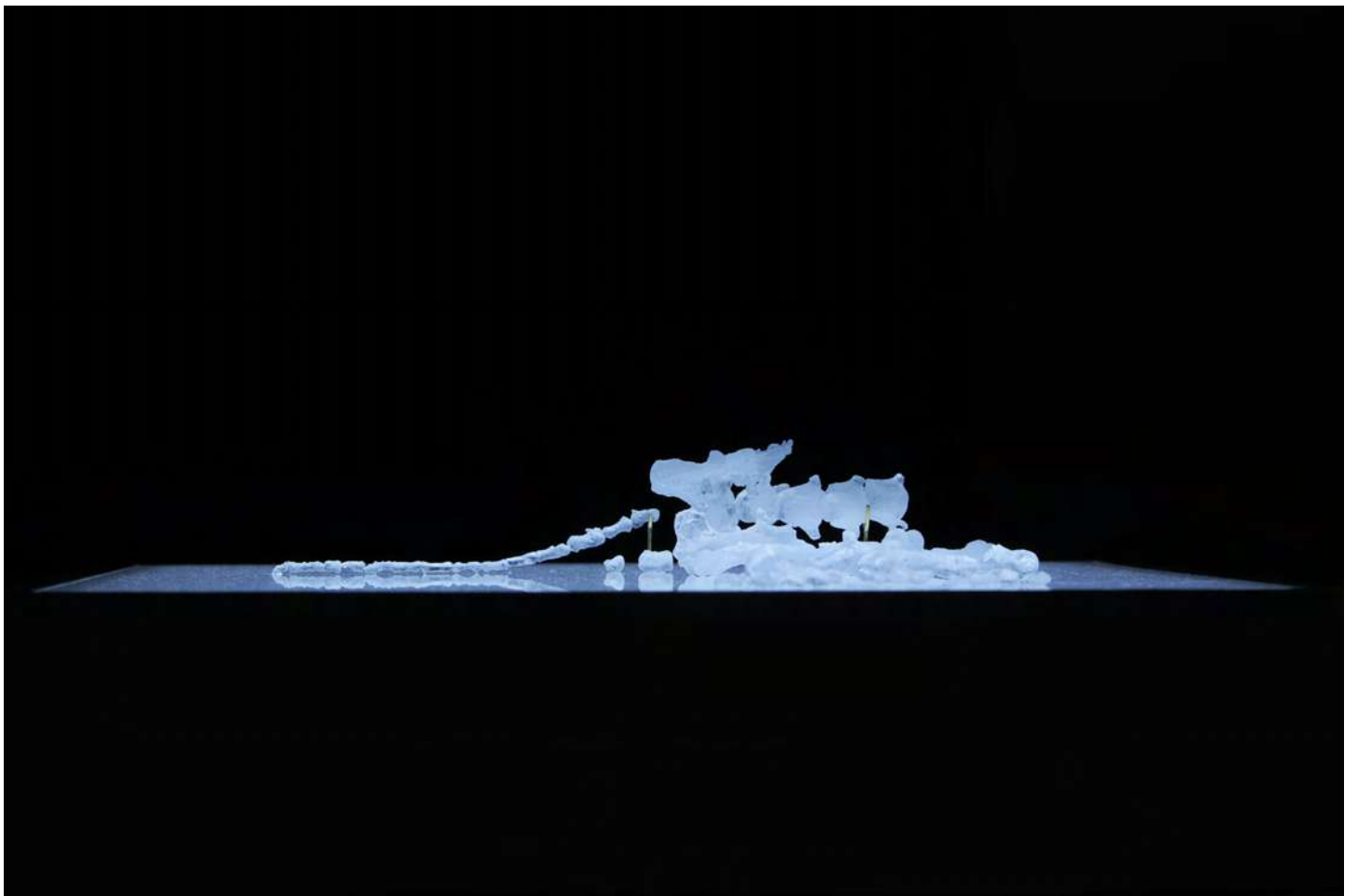
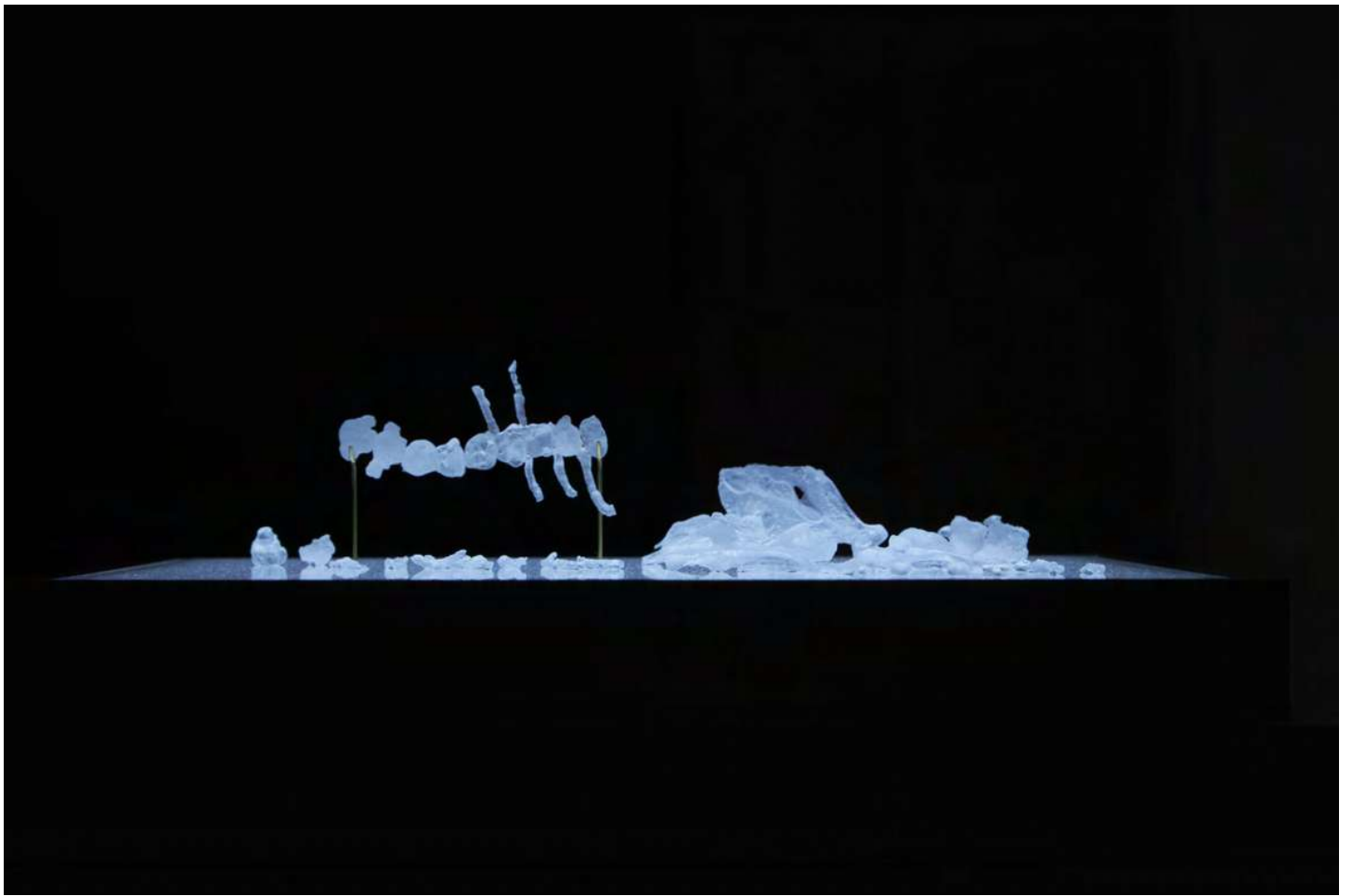
2021

レントゲンフィルム、シャウカステン

310×260×56(mm)



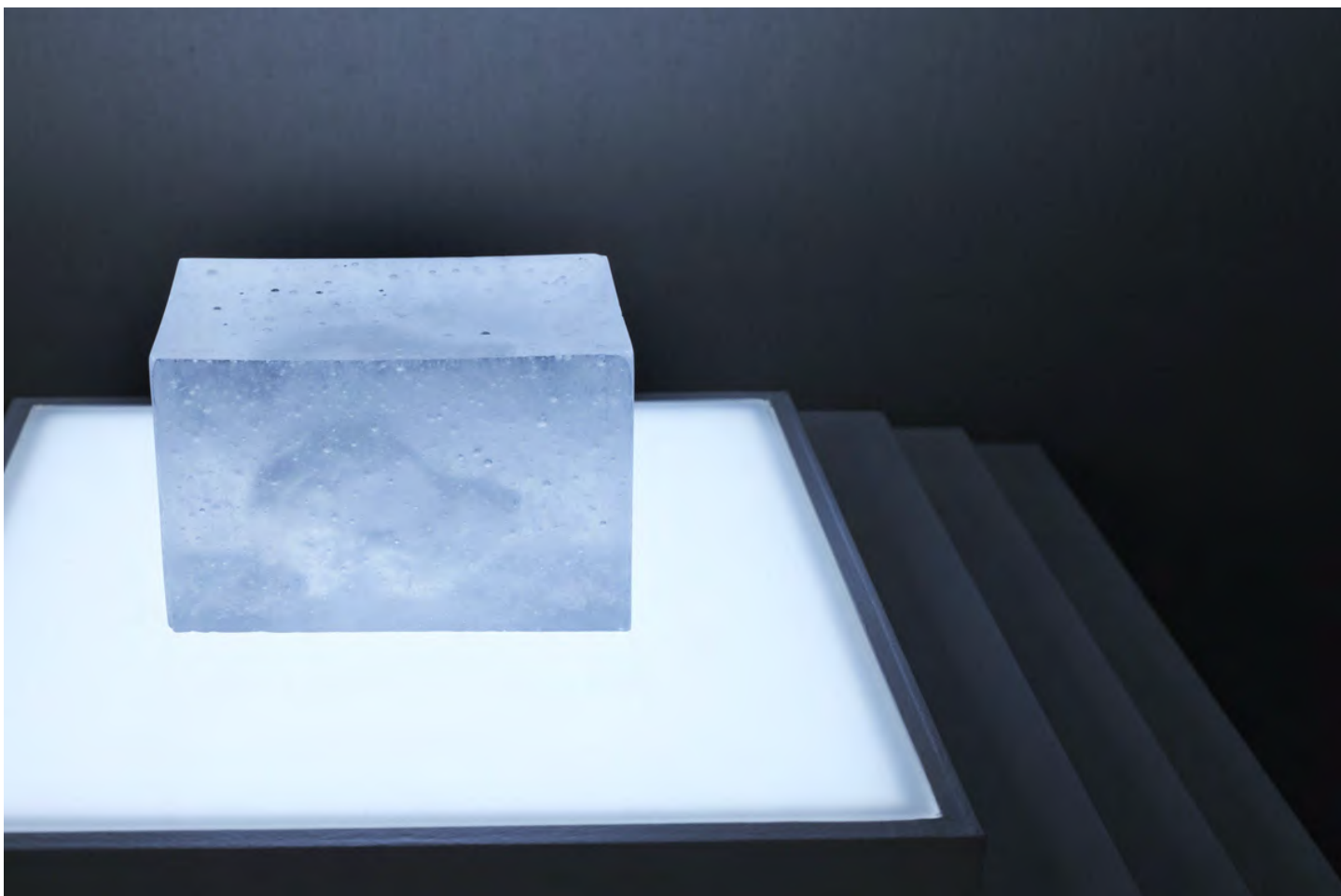
変身物語 METAMORPHOSES #3 Pâte de verre 部分



変身物語 METAMORPHOSES #3 Pâte de verre 部分



変身物語 METAMORPHOSES #4 Ceramics
2021
磁器
サイズ可変



変身物語 METAMORPHOSES #5 Presence or absence

2021

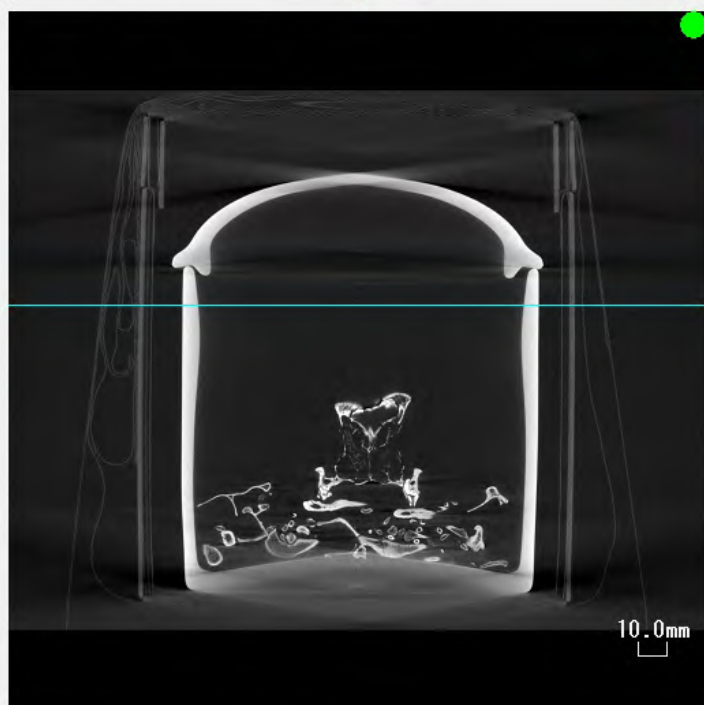
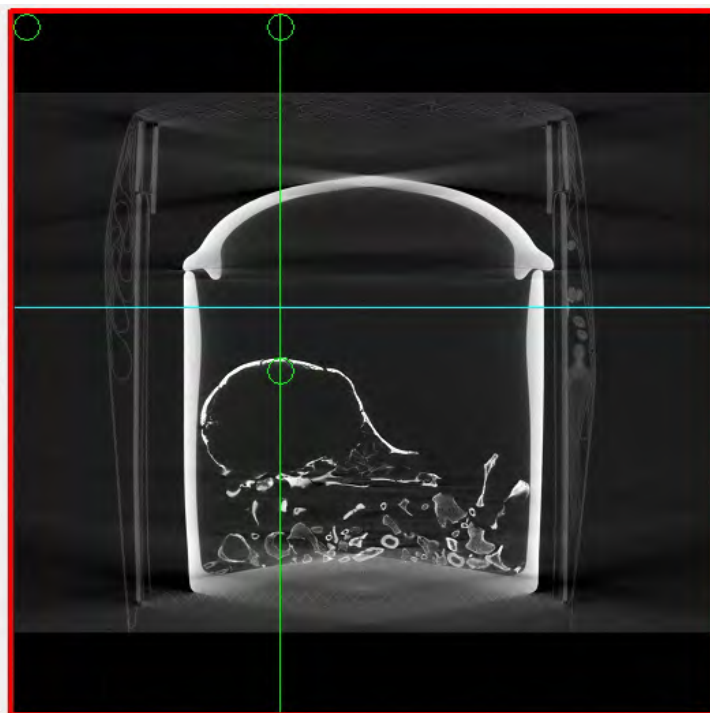
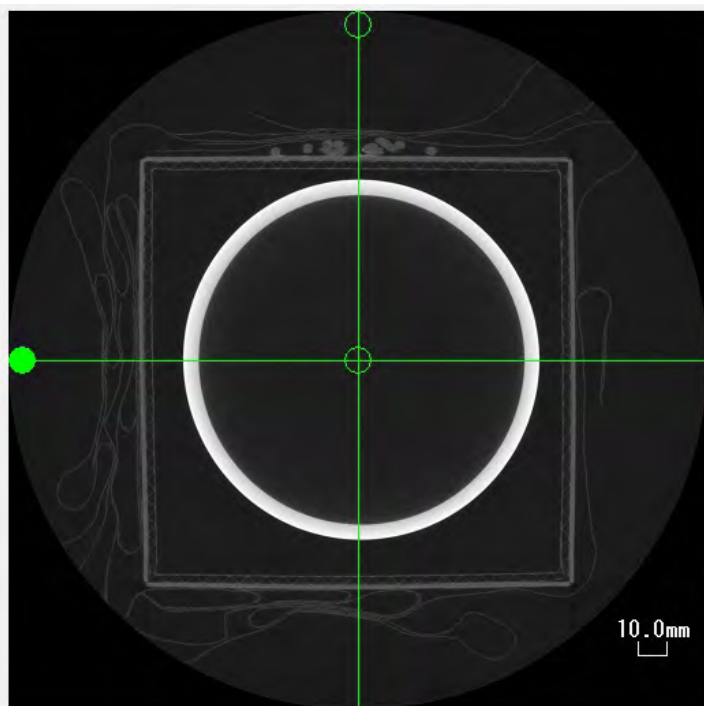
ガラス

90×140×90(mm)

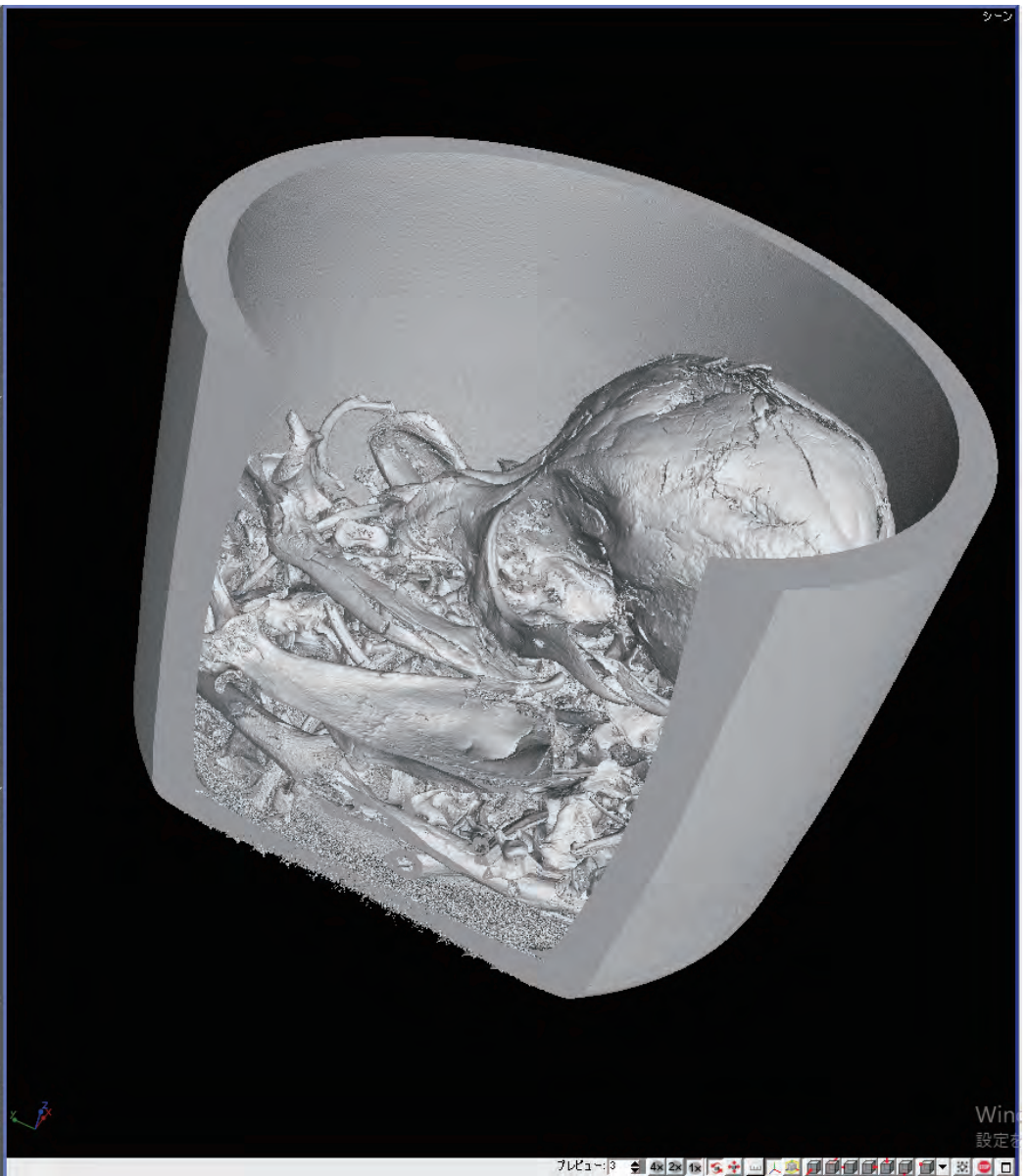
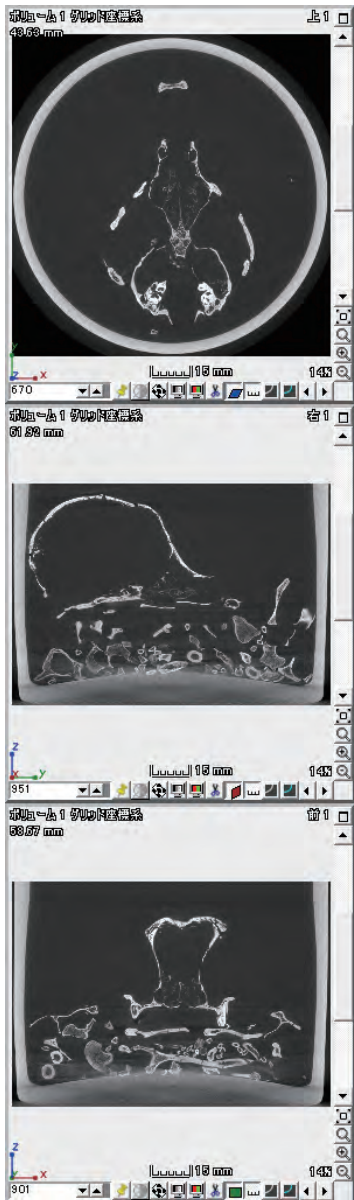


変身物語 METAMORPHOSES #5 Presence or absence 部分

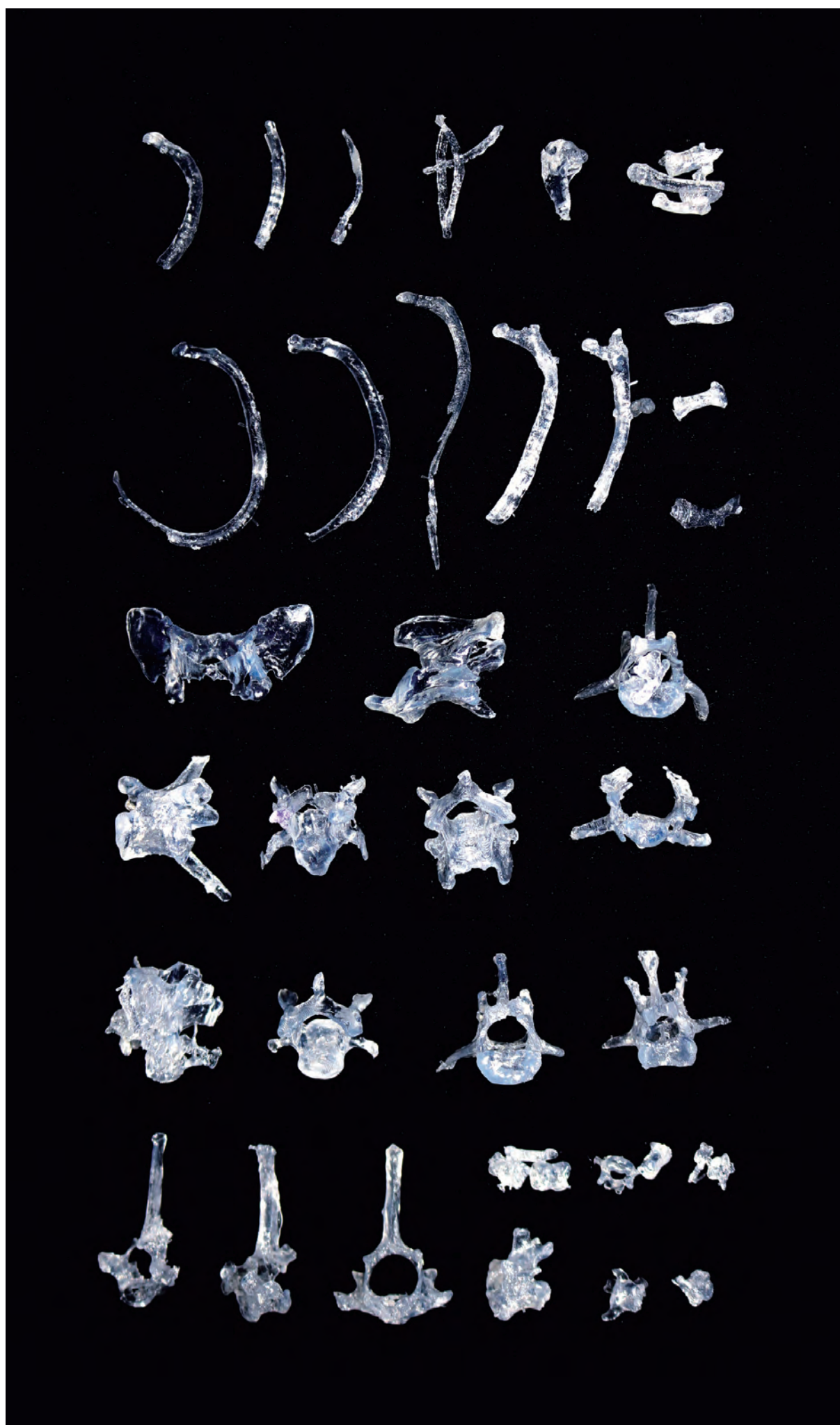
変身物語 CTスキャンデータ作成の様子 (2018/10/3)













3Dプリンタ出力モデルをパート・ド・ヴェールの技法でガラスに置き換える

変身物語 METAMORPHOSES #4 Ceramics 制作の様子



変身物語 METAMORPHOSES #4 Ceramics 制作の様子



保存と再現

2013年に制作した修了制作作品



保存と再現 Conservation and Reproduction

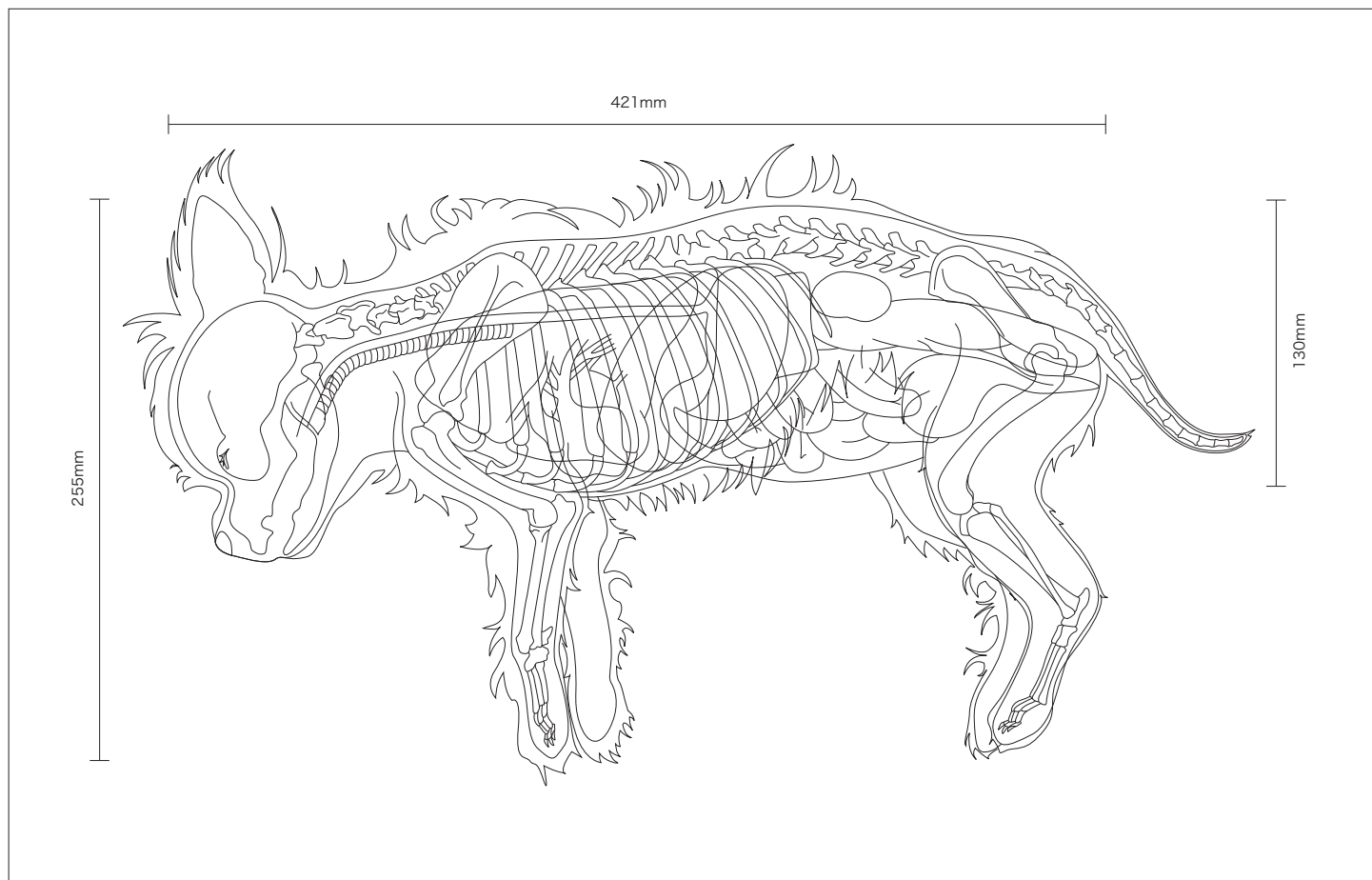
2013

ウレタン、羊毛、エアークンプレッサー他

130×400×250 (mm)



保存と再現 部分



保存と再現 制作の様子

保存と再現

愛犬は今年で10歳(2015年当時)になる。

愛犬は5年前から骨髄の病気にかかり、自分で歩いたり、食べたり飲んだりができない寝たきりの状態にあった。

視力がなく、聴覚はあるかどうか分からない。日々確実に弱っていきながら、家族に愛され暮らしている。

私はこの犬のことが大好きで、離れたくない、ずっと一緒にいたい、死んでほしくないと思っていた。彼女と一緒にいる時間はとても幸せで、離れるときはこれが最後かもしれないと思い、とても辛かった。少しずつ死に近づく彼女とこの状況に対して、なにかしなければと思っていた。

そして彼女の身体の正確な大きさや、身体の構成について調べ始めた。彼女の骨格や内臓、筋肉や皮膚など、彼女を構成する要素をできる限り全て制作することで、彼女の今の姿を現世に保存しようと考えたのである。また、制作によって彼女の姿を保存できたら、制作した肺に人工呼吸器を繋ぎ、呼吸する姿まで再現しようとした。

制作は骨格から始めた。骨格から作り始めることが、死から生へ向かう、蘇生のための儀式のように感じた。筋肉や皮膚は、柔らかいゲル状の素材を使った。撫でたときの感触も再現し、手足の曲がりや呼吸による腹部の上下も可能にした。

骨や内臓や筋肉は、制作が進むにつれ見えなくなり、最終的には皮膚に覆われてしまう。しかし生きる姿を保存するために、外見だけを再現しようとは思わなかった。骨から作る儀式のこともあったし、何より彼女を生かしている構造こそ、この上ない大切な宝物のように思えた。その構造によって、彼女は今苦しみ、しかし生きている。

内臓や筋肉、皮膚を制作し、肺には人工呼吸器のかわりになる小さなエアークンプレッサーを繋いだ。空気を肺に送り込み、腹部が一定間隔で上下すると、だんだんエアークンプレッサーの熱が移り、犬の身体が暖かくなってきた。

制作が終わり、コンプレッサーによって呼吸を続けるこの犬を見ると、単なる愛犬の複製物とは違う、奇妙に独立した生物のように思えた。愛犬とはよく似ているが、この生物にはこの生物の、独立した意識を持っているように見えた。

私はこの犬の神様だった。私はこの犬の生死をコントロールすることができ、骨折したり、肺が破れたりすれば、それを治すことができた。この犬にとって私は絶対的な存在であり、私はこの犬を宝物のように思った。

制作中の作業机の上は、一見すると解剖実験をしているようで、この犬を生かそうとしているのか、それとも殺しているのか分からなくなるような瞬間があった。完成した姿も、生きているか、眠っているか、死んでいるか、判断がつかない。しかし私は彼女との永遠を願ったし、骨から制作を始めた一連の作業は、私にとって希望そのものだった。

この犬は今も、生死の境で横たわっている。横たわる彼女に、私は静かに空気を送る。

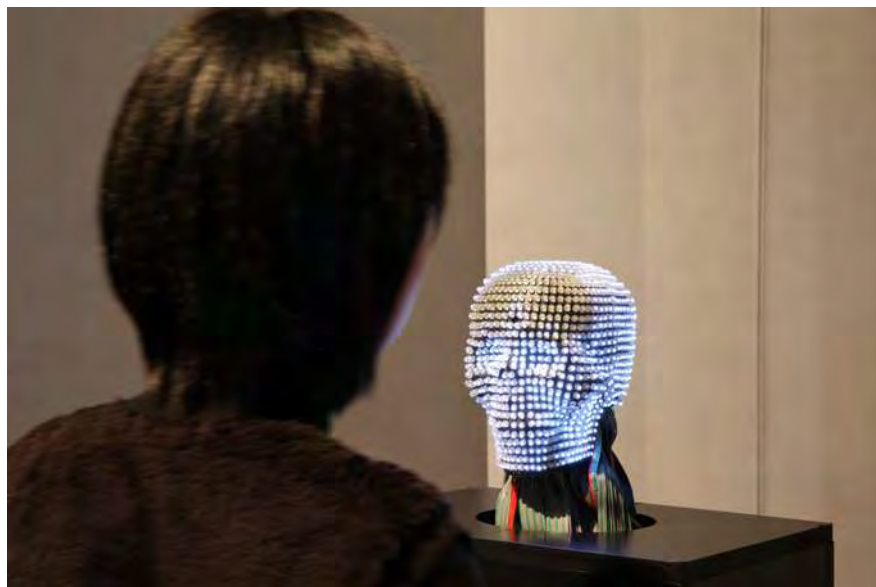


だれも知らない生き物

2012

ビニール、配管パイプ、ファンモーター他

1000×1500×1500 (mm)



You won't die in electron
2013
LED、Webカメラ他
210×200×200 (mm)

展覧会・レジデンス

個展・グループ展・レジデンスの記録

グループ展

展覧会名：南飛騨 Art Discovery

会期：2024年10月19日～11月24日

会場：岐阜県下呂市萩原町一帯

概要：こけのみち(旧薬草園)にはかつて400種類の薬草が植栽されていたが、その多くが根付かず樹名板は撤去され、現在は元々自生する植物を残し「こけのみち」として運営されている。しかしこの地域と薬草の関わりは深く、古くから日々の生活と密接に関わっていた。これら薬草にまつわる文化を保全するため新たな樹名板となるような作品を考え、作家は、交流のあった岐阜盲学校と協力し、児童と薬草を観察・触察しその特徴を形にした。形はガラスに写し取られ、目にみえる特徴だけではない、植物の様々な要素を記録した「植物触図」として元となった植物の隣に設置した。

<制作の様子>





グループ展

展覧会名：都市にひそむミエナイモノ展 Invisibles in the Neo City

会期：2023年12月15日～2024年3月25日

会場：SusHi Tech Square Space

概要：東京都が運営する、最先端のテクノロジーやメディアアートを紹介するギャラリースペース「SusHi Tech Square Space」にて企画展に参加した。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻八谷和彦研究室からの特別展示として、作品「蘇生するユニコーン」を制作開始した2014年から現在までの歩みを一望できる展示を行った。

<展覧会チラシ>

**都市にひそむ
ミエナイモノ展**
**Invisibles
in the
Neo City**

このまちにいる
無数のミエナイモノたちの
声を聞く――
未来への想像をひろげる
体験型の展覧会

Creators
菅野創十
加藤明洋十
綿貫岳海
gluon
+d Digital Archive Project
Qosmo
佐藤朋子
セマーン・ペトラ
Tomo Kihara
& Playfool
長谷川愛
藤倉麻子

【特別展示】
蘇生するユニコーン
（東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻八谷和彦研究室）

【開催展示】
東京のミエナイモノ

2023.12.15金 →
2024.3.10日

SusHi Tech Square 1F Space
入場無料

SusHi Tech TOKYO 東京都
sushitech-real.metro.tokyo.lg.jp/second/

アートを通じて思考を自由に！ みんなで未来を想像するスペース

**都市にひそむ
ミエナイモノ展**
**Invisibles
in the Neo City**
2023.12.15金 → 2024.3.10日

クリエイターたちが思いかける、未来の都市像

Creators
菅野創十
加藤明洋十
綿貫岳海
gluon
+d Digital Archive Project
Qosmo
佐藤朋子
セマーン・ペトラ
Tomo Kihara
& Playfool
長谷川愛
藤倉麻子

【特別展示】蘇生するユニコーン
（東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻八谷和彦研究室）

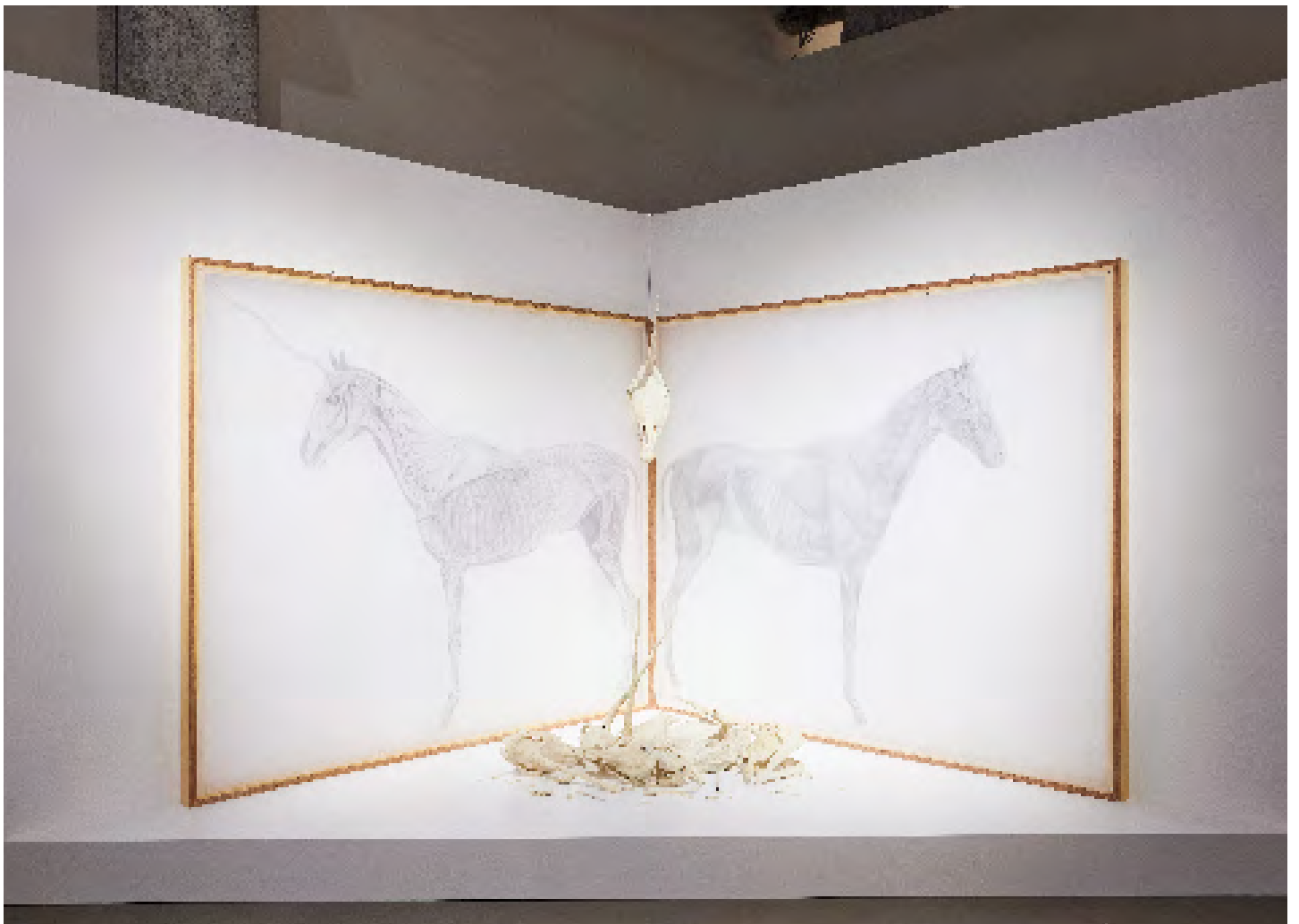
SusHi Tech Square
1F 都市にひそむミエナイモノ展
@sushitech_space
東京のミエナイモノ展で体験！
https://sushitech-real.metro.tokyo.lg.jp/second/

2-3F Tokyo Innovation Base

<会場の様子>



<会場の様子>



個展

展覧会名：平野真美 個展「架空のテクスチャー」

会期：2023年8月4日～8月14日

会場：WHITEHOUSE ナオナカムラ

概要：東京都新宿区にあるオルタナティブギャラリー「WHITE HOUSE」にて、ナオナカムラのキュレーションのもと個展を行った。
2014年から継続して制作している作品「蘇生するユニコーン」の新作を展開した。

<会場の外観>



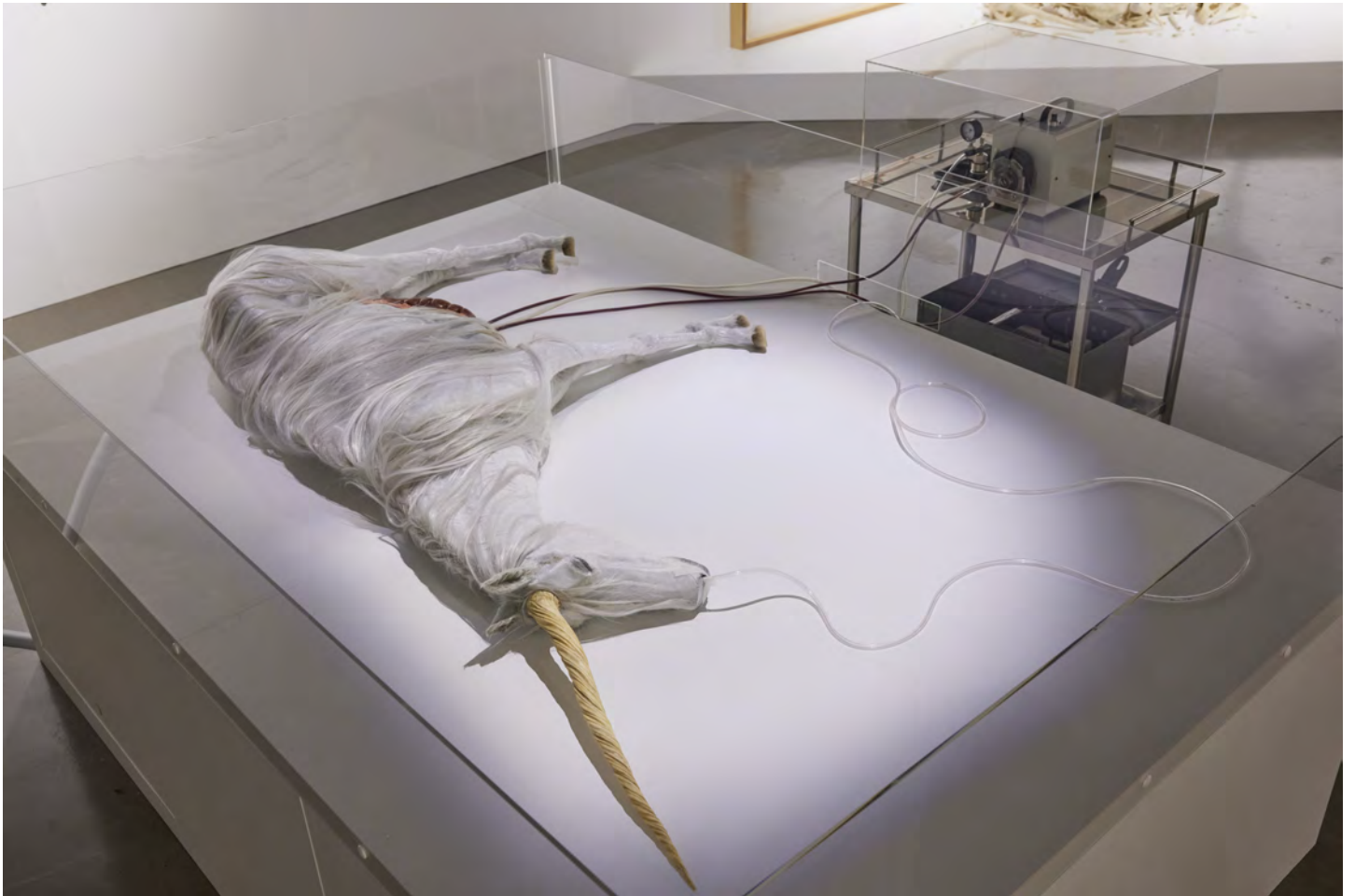
<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



個展

展覧会名：平野真美 個展「空想のレッスン」

会期：2023年2月4日～3月5日

会場：Maki Fine Arts

概要：東京都新宿区にある現代美術のプライマリーギャラリー「Maki Fine Arts」にて個展を行った。

作品「蘇生するユニコーン」の新作ドローイングや、ユニコーンの原寸大の姿を描いた作品などを展開した。

<会場の外観>



<会場の様子>



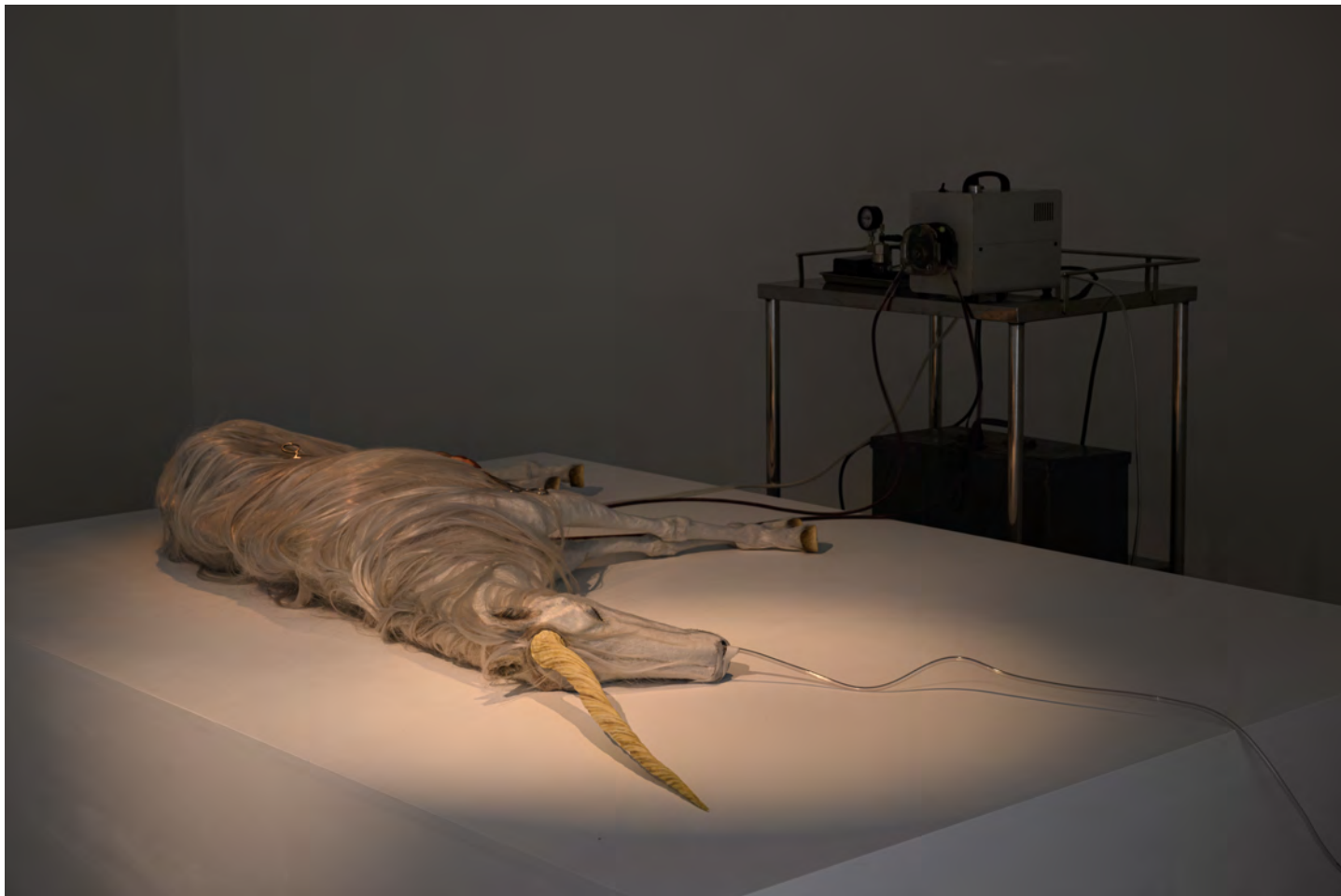
<会場の様子>



<会場の様子>



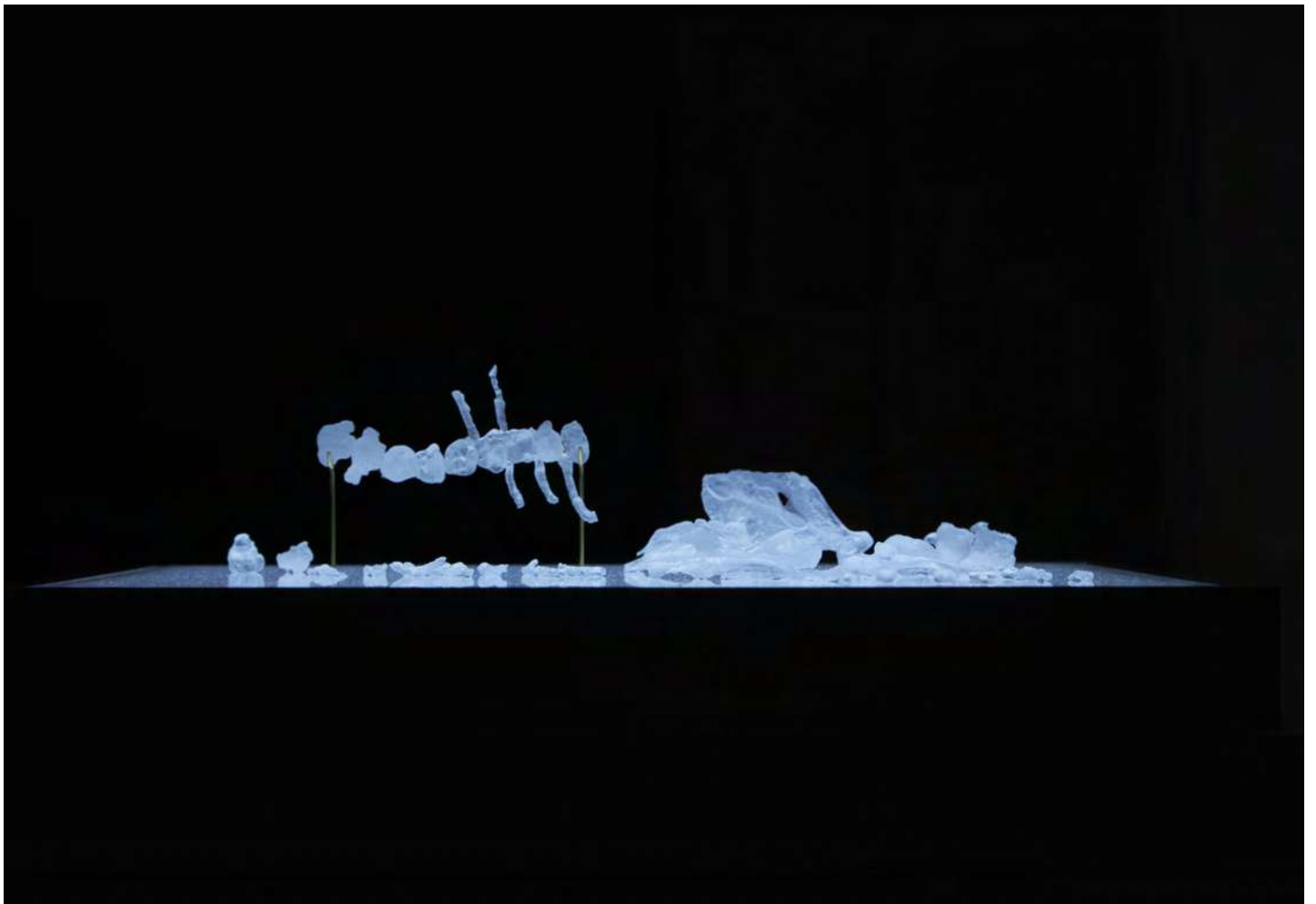
<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



個展

展覧会名：3331 ART FAIR recommended artists 平野真美 個展「変身物語 METAMORPHOSES」

会期：2021年1月9日～2月22日 ※コロナウイルス感染拡大の影響を受け、当初の会期1/8～2/13から変更

会場：3331 Arts Chiyoda

概要：「3331 ART FAIR 2020」でレコメンドアーティストに選出され、その副賞として「3331 Arts Chiyoda」の企画・主催で開催された個展。5年前(当時)に亡くなった犬の遺骨のCTキャンデータを3Dプリンタで出力し、ガラスや陶器へ変容させるシリーズ作品《変身物語 METAMORPHOSES》を発表した。

<展覧会DM>



3331 GALLERY #041
3331 ART FAIR recommended artists

平野真美 個展
Mami Hirano Solo Exhibition
「変身物語 METAMORPHOSES」
METAMORPHOSES

2021 1/8 [Fri.] - 2/13 [Sat.]
11:00 - 19:00 ※入場無料 / 会期中無休 ※最終日2/13(土)は17:00まで

開場イベント 2021年1月8日(金) 18:00 - 19:00 アーティストトーク
19:00 - 20:00 レコメンドセッション
※無料ですが会場は定員を超えています。
併し、希望者多数の場合は会場の都合により先着順とさせていただきます。

2021年2月13日(土) 15:00 - 16:00 クロージングトーク
「高橋洋介(金沢21世紀美術館キュレーター) × 平野真美(アーティスト)」 ※無料 / 要予約

平野真美は、骨格や皮膚、血管など生物の身体を構成するあらゆる部位を物理的に制作することで、実在しない空想上の生物や瀕死の生物などと人工的に再現し作品にしてみました。幼少の頃から周囲に様々な物語が溢れ、物語に登場する不思議な生き物との優しい関係を築いてきた平野は、大人になるにつれ、幼い頃信じていた架空の生き物たちが実際には存在しないと知り、制作を通して不在の生物の保存・再現を目指すようになります。本展では、5年前前に亡くなった平野の愛犬の遺骨を3Dスキャンし、繊細なガラスや陶器へと変容させ、新しい生を与えています。作品は作家の個人的な体験や感情から生み出されていますが、現代のテクノロジーの力を借り、生と死という根源的なテーマに問いを投げかけているかのようです。わたし達が気づかぬうちに失った夢や希望・幻想を蘇生させる平野が紡ぎ出す「変身物語」を、ぜひと高覧ください。

平野真美の作品は、いつも死と向き合い抗うことで、我々が今とどこかに生きるのかを指し示してきた。死はゆく愛犬を精巧に複製した代表作「保存と再現」(2014)が愛する者と現世に留めようとする「蘇生の儀式」であるのに対して、新作では、その「転生」が模索されている。

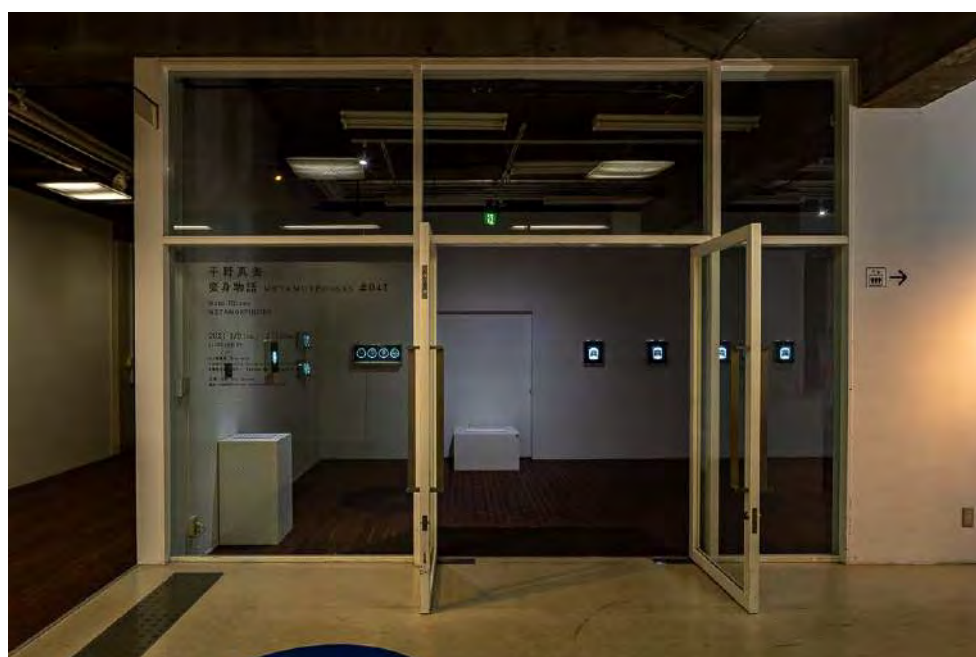
今や「死」は、効率的で幸福な生活を阻むものとして郊外に隔離されているが、本作において平野は「死」を美しく観しめるものとする増殖させる。

それは、根絶しえない死者との関係性を、現代の都市生活に介入させることで、人間以外を含む他者の死に対して、私たちがいかに敬意を払えるのかを根源的に問う。

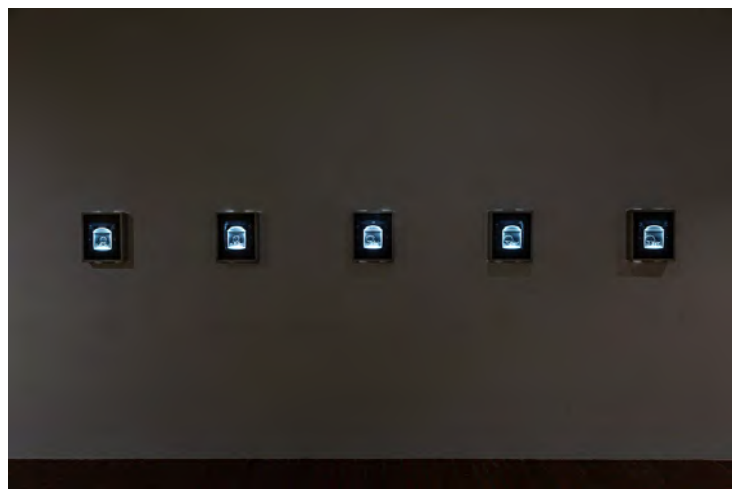
高橋 洋介(金沢21世紀美術館キュレーター)

3331 ARTS LTD 〒101-0021 東京都千代田区外神田6丁目11-14 3331 Arts Chiyoda 1F 3331 Gallery (104)
TEL: 03-6803-2441(代表) FAX: 03-6803-2442 URL: <https://www.3331.jp>

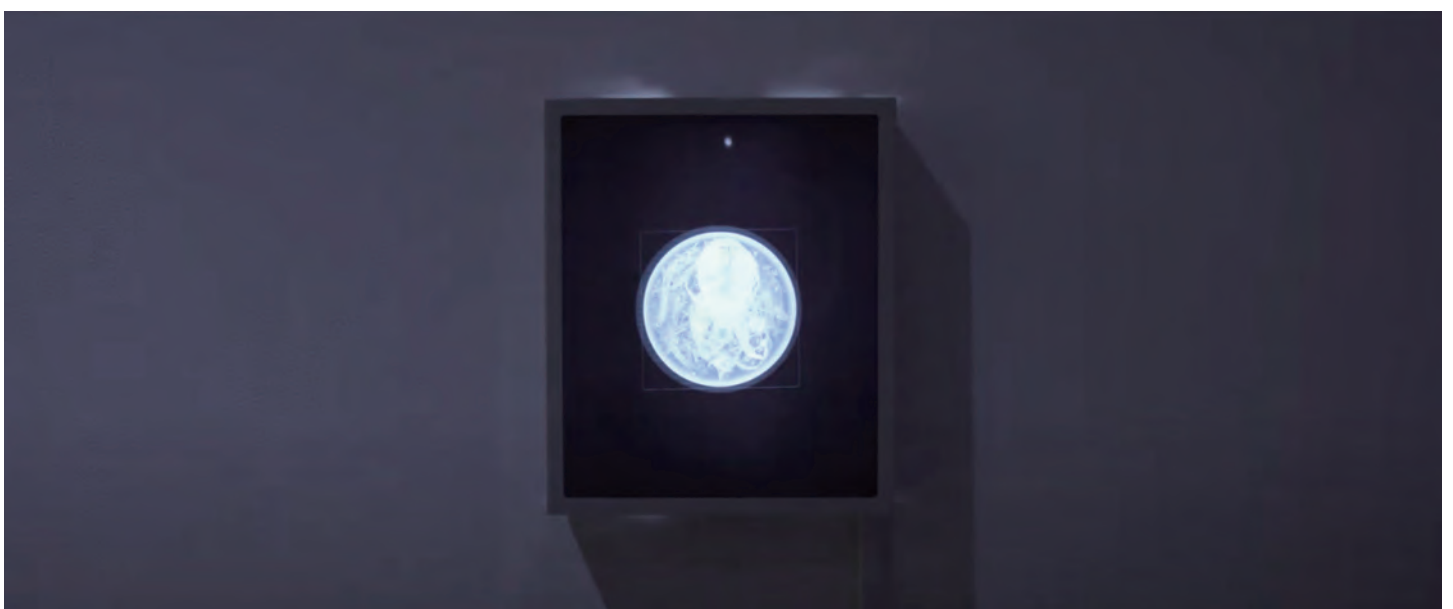
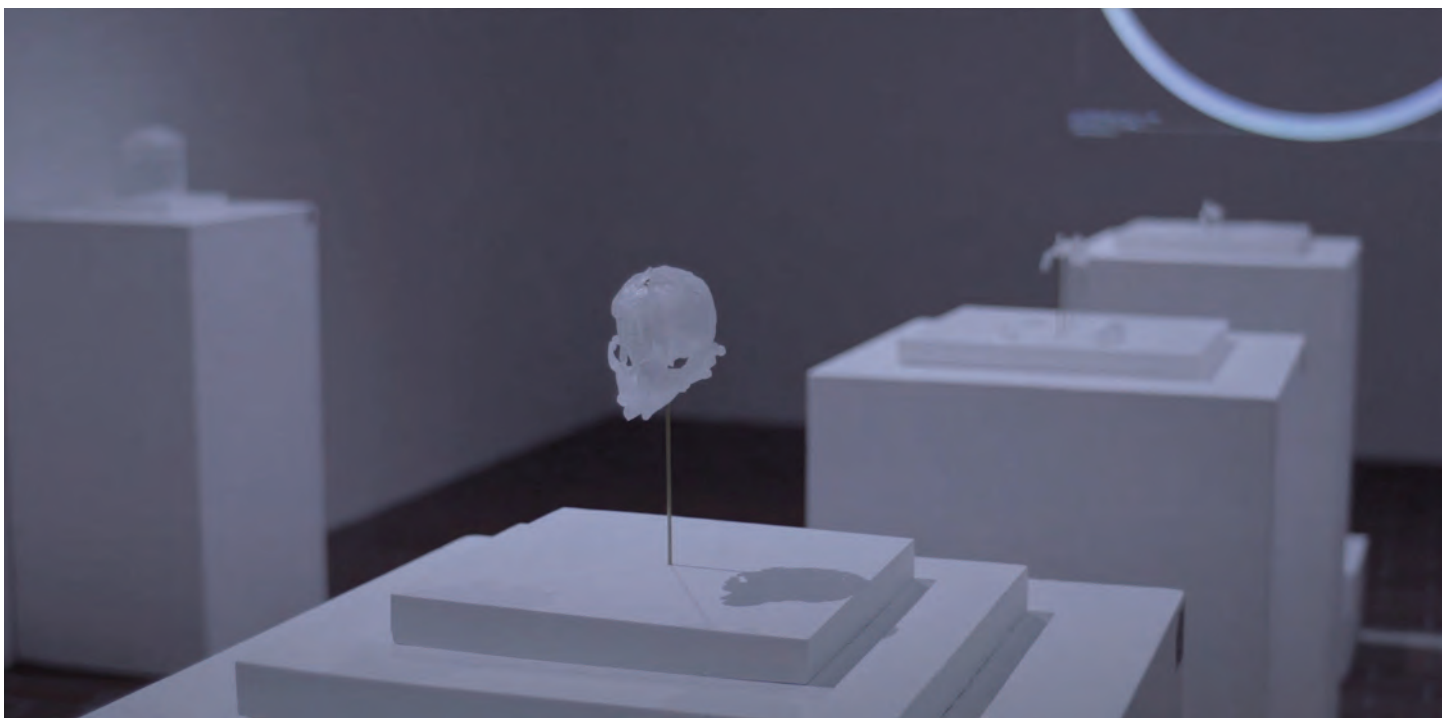
<会場の様子>



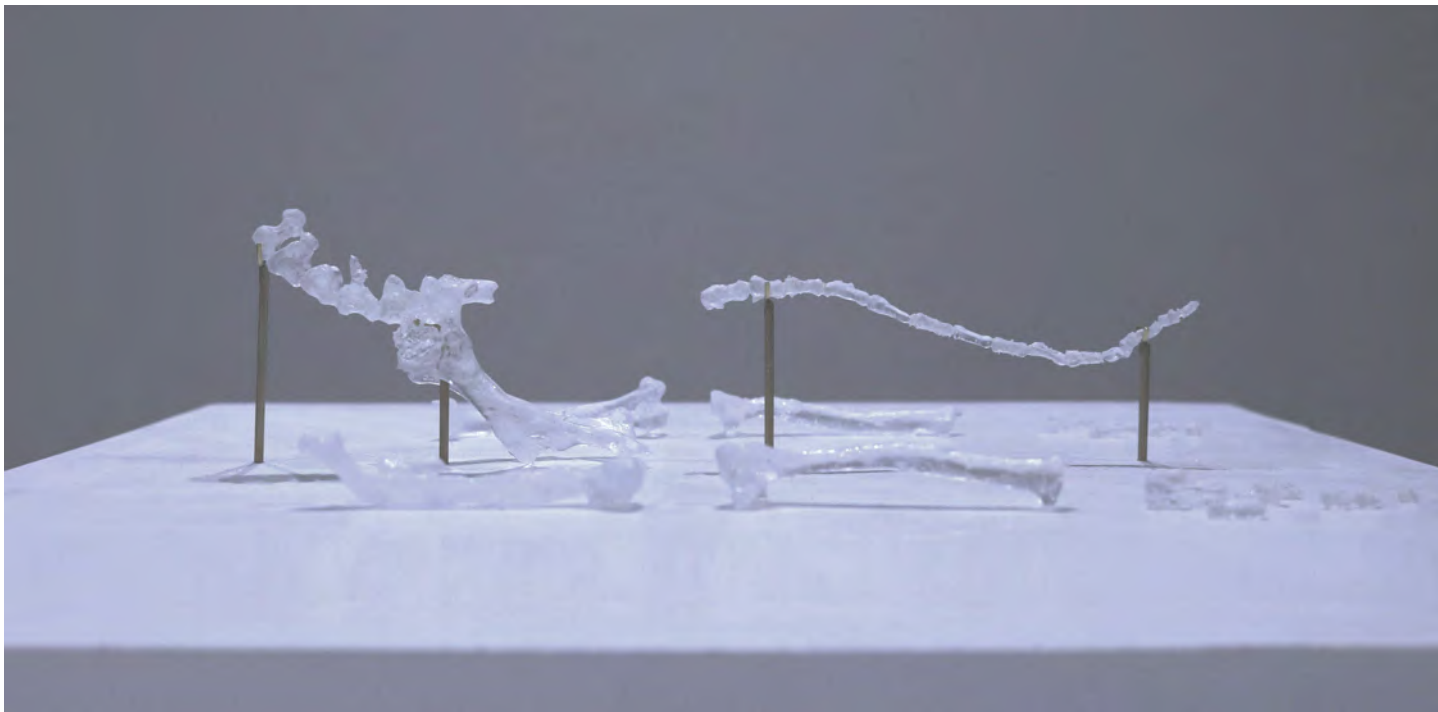
<会場の様子>



<会場の様子>



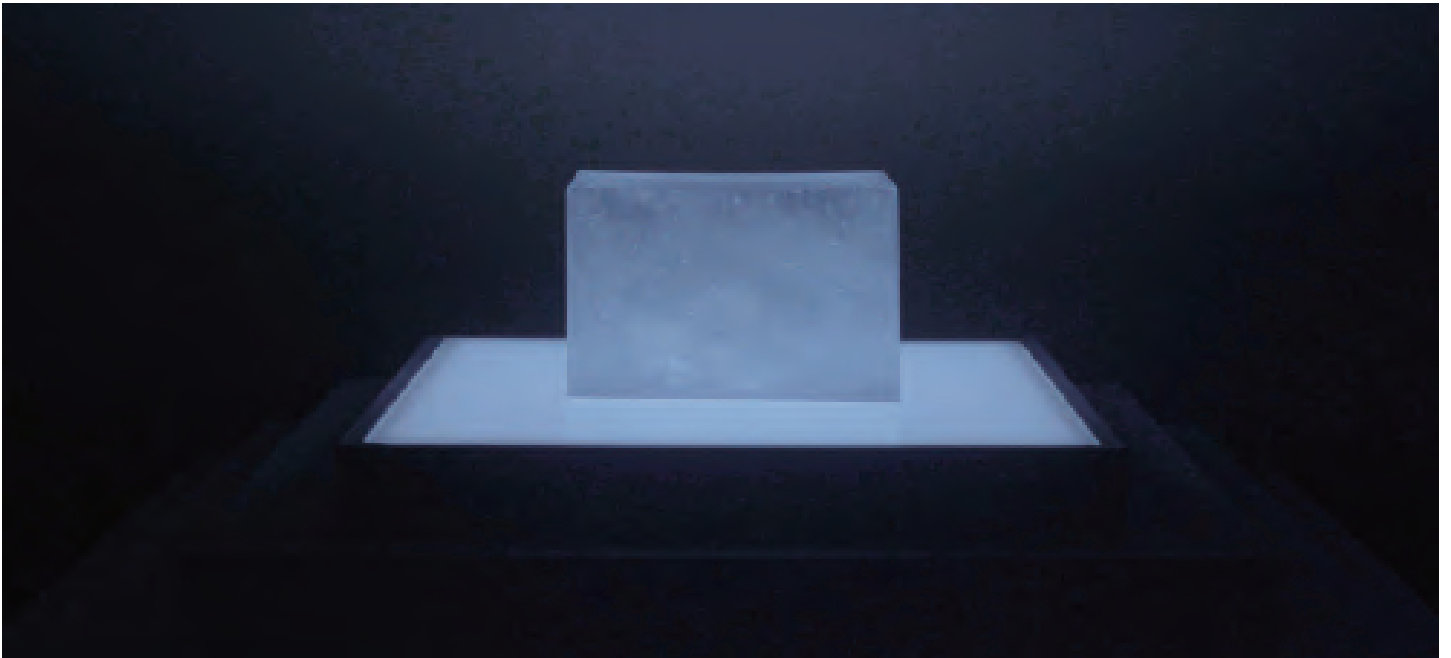
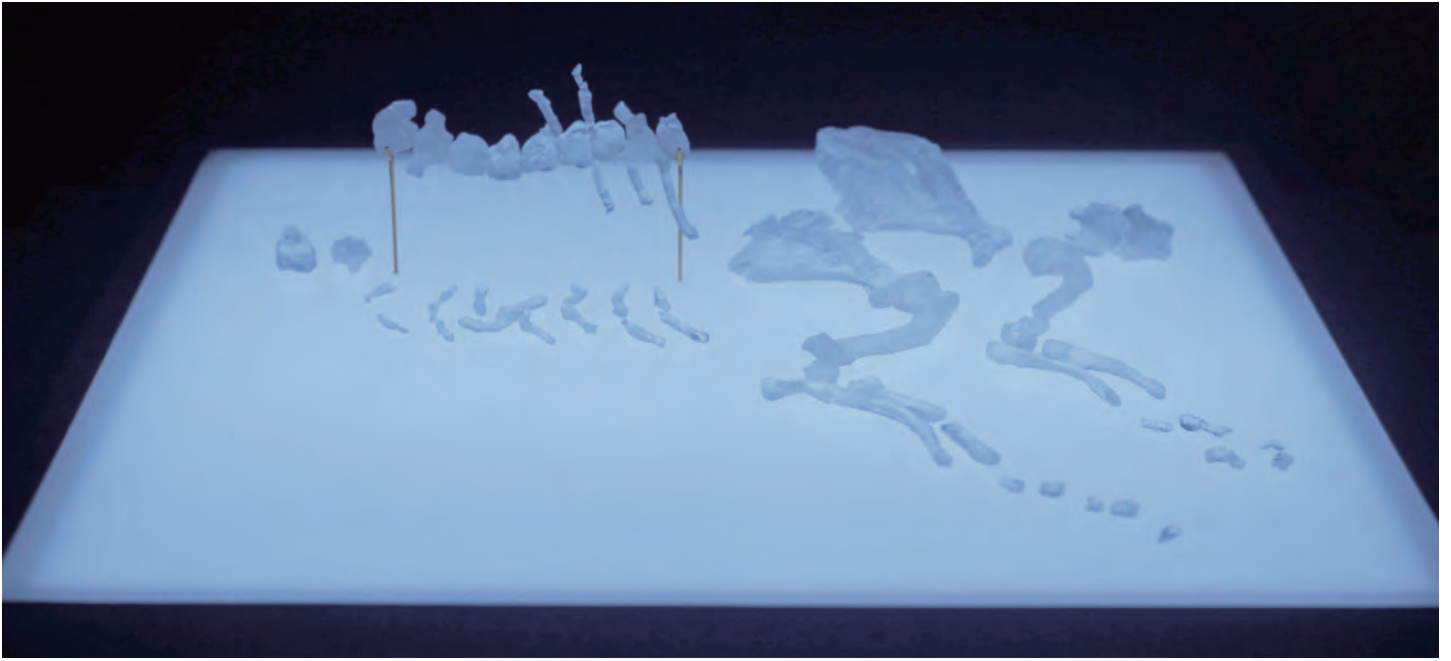
<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



グループ展

展覧会名：セカンド・フラッシュ

会期：20年1月12日～1月21日

会場：岐阜県美術館

概要：岐阜県美術館のリニューアルオープン特別企画として開催された企画展で、過去に岐阜県美術館主催のレジデンス企画に参加した4組の作家の成果発表展。岐阜県立岐阜盲学校でのレジデンスを元に、児童生徒と共作した作品群と、《蘇生するユニコーン》を新たに要素を追加して展示発表した。参加作家はナデガタインスタントパーティ、松本和子、宮田篤+笹萌恵、平野真美。

<展覧会チラシ>

Human Driving School

ナデガタインスタントパーティ
(中崎達・山城大智・野田野子)
平野真美
松本和子
宮田篤+笹萌恵

Second
flush

セカンド・フラッシュ
2019.11/3(日・祝)——2020.1/5(日)
10:00-18:00(入場は17:30まで)

会場：岐阜県美術館 展示室3 ほか
休館日：月曜日(祝・休日の場合は翌平日)、12/23(月)~1/3(金)
夜間開館日：11/15(金)、12/20(金)は20:00まで開館(入場は19:30まで)

入場無料

セカンド・フラッシュ

岐阜県美術館は、リニューアル休館を機に、館を飛び出してアートプロジェクトやアーティストインレジデンスに取り組みました。今回、その経験や作品を糧として、葉が生い育ち、香り立つように、4組の作家が美術館で発表をします。

今、多様な人々が生きる社会の拠点として、美術館の果たす役割はますます大きくなっています。アートとは、未来を予見し、問題提起をするもの。そしてまた、人々や価値観を繋ぎ、場をつくることもできます。休館中に試みた新しいアートプロジェクトやレジデンスが「ファースト・フラッシュ」だとすると、本展「セカンド・フラッシュ」は、サイトスペシフィックな表現を美術館でいかに結晶化するかの挑戦であり、あの特別な出来事から含み合いという願いでもあります。

時間と共に熟成し、収穫された「セカンド・フラッシュ」が頼みだす味をどうぞお楽しみ下さい。

ナデガタインスタントパーティ× 養老公園
(中崎達・山城大智・野田野子)
Nadegata Instant Party (NAKAZAKI Tohru + YAMASHIRO Daicaku + NODA Tomoko)

2006年より活動を開始。「場」が変化する過程や体験を重視し、映像や演劇的手法などを組み合わせた作品で高く評価される。「アートまるカット2018 養老公園プロジェクト Parking Promenade」(2018)では、《養老天命広延地》を引用し、野外プロジェクトの可能性を示した。本展では、その解放感と無知な身体型作品を、美術館の展示室に展覧する。

平野真美× 岐阜盲学校
HIRANO Mami

1989年生 岐阜県出身。ユニコーンの骨格・内臓から毛皮まで、身体を構成するあらゆる部位を精巧につくり、生命維持装置をつなぎ蘇生を目指す作品をライフワークとする。「アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校」(2018)での視覚を巡る思索を、新作の半立体ケースリー、ユニコーンや盲学校の生徒作品を使いながら探る。

松本和子× 北方町生涯学習センターきらり
MATSUMOTO Kazuko

1988年生 大阪府出身。水や砂や石炭といった自然素材を使うプロセス技法を用いて、きらめく光や吹き抜ける風、人の気配が漂う室内風景を独特の詩情で描く。「アーティスト・イン・ミュージアム 松本和子 Meets 北方町生涯学習センターきらり」(2019)で制作した壁画をもとに、表面を剥ぎ取るストロフ技法を応用し、重層的な空間表現を試みる。

宮田篤+笹萌恵× 岐阜県図書館
MIYATA Atsushi+SASA Moe

2009年より活動を始める。お話の紙を地味住民と相談する連載マンガなど、「仕組みや仕掛け」によって生じる他者とのイメージのずれや重なりを作品のきっかけとしている。「アーティスト・イン・ミュージアム 宮田篤+笹萌恵 Meets 岐阜県図書館」(2019)から連続する本展では、言葉のイメージが変容していく《微分点》を、時間・空間のゆるぎをやりとりを企む。

Second flush/flash

セカンド・フラッシュ「second flush」は、紅茶の収穫期を表す言葉です。陽々しくさわやかなファースト・フラッシュの次に摘まれ、芳醇で豊かな味わいを持つ。flushとは、「芽吹き」。本展では、作品の輝きや繊細の光をイメージさせる「陽光、ひらめき」のflushを音で表しています。

関連プログラム

- 1 出品作家4組のシネマートーク
11/3(日・祝) 13:00-14:00
会場：展示室3ほか
ブレイク・アート・オープンイベント(年末恒例)と併せて実施。お楽しみあり。
- 2 アートまるカット「緑草の森でおいしくさるる」呼びかけワークショップ特別出演
11/12(日・祝) 10:00-11:00(無料入場無料)
会場：多目的ホール
出演：岐阜県美術館理事
- 3 カジュアルトーク 松本和子×北方町の方々
11/14(月・祝) 14:00-15:00
会場：多目的ホール
- 4 紅茶を楽しむTea Party! ワークショップ
11/23(土・祝) 14:00-16:00
会場：多目的ホール
講師：国際茶師 Sashimi (Sae Hoshino)
定員：12人 参加費：1,800円
抹茶をスプーンで盛りながら、作品のイメージを表現しながら紅茶を楽しむ。作品のイメージをスプーンで盛りながら、作品のイメージを表現しながら紅茶を楽しむ。11/23(土)開催。申込み多数の場合は抽選。
- 5 キーノートーク 観覧客委員といっしょにセカンド・フラッシュ(展)を味わおう!
12/20(金) 18:30-19:00
会場：展示室3ほか
岐阜県美術館理事 松本和子
観覧客委員 中崎達
- 6 カジュアルトーク Nadegata Instant Party×平野真美(岐阜県立岐阜盲学校校長)、笹萌恵(養老町立北方小学校校長)
12/21(土) 14:00-15:30
会場：多目的ホール
観覧客委員 中崎達
- 7 平野真美×ナヤローネ アートツアー
12/22(日) 14:00-15:30(定額13:30-) 定員：多目的ホール
観覧客委員 中崎達
観覧客委員 中崎達
- 8 宮田篤+笹萌恵 おはなしあそび 機分絵
2020年1/4(土) 13:30-15:30
会場：展示室3ほか
観覧客委員 中崎達
観覧客委員 中崎達

主催・お問い合わせ

岐阜県美術館
THE GIBU MUSEUM OF GIBU CITY, GIBU

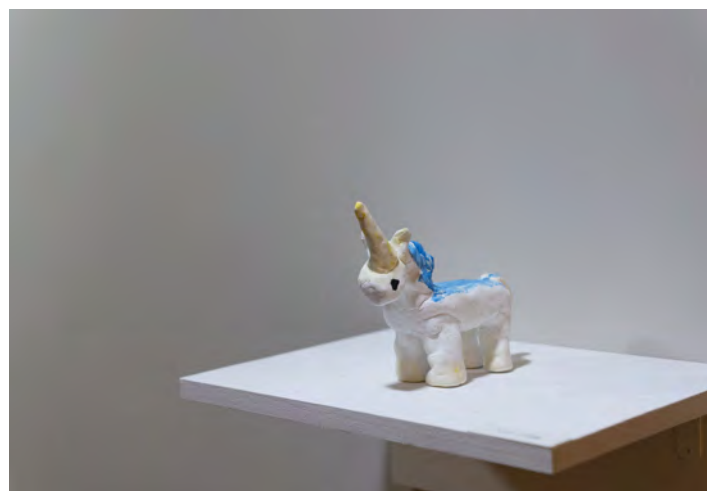
岐阜県美術館 展示室3 ほか
休館日：月曜日(祝・休日の場合は翌平日)、12/23(月)~1/3(金)
夜間開館日：11/15(金)、12/20(金)は20:00まで開館(入場は19:30まで)

入場無料

<会場の様子>



<会場の様子>



グループ展

展覧会名：2018年のフランケンシュタイン バイオアートにみる芸術と科学と社会のいま

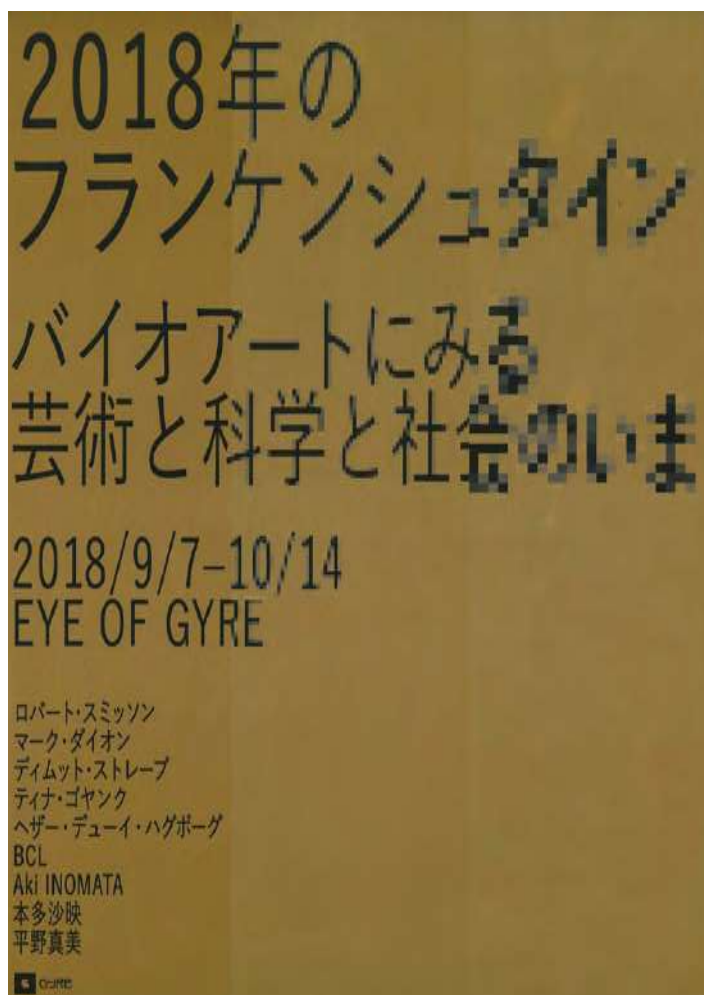
会期：2018年9月23日～11月28日

会場：GYRE

概要：東京都渋谷区神宮前にあるギャラリー「EYE OF GYRE」にて、近年世界的な隆盛を見せる芸術の新潮流「バイオアート」を国内で初めて大々的に紹介した企画展で、《蘇生するユニコーン》を展示発表した。

参加作家はロバート・スミッソン、マーク・ダイオン、デムット・ストレーブ、ティナ・ゴヤンク、ヘザー・デューイ＝ハグボーク、BCL、AKI INOMATA、本多沙映、平野真美。

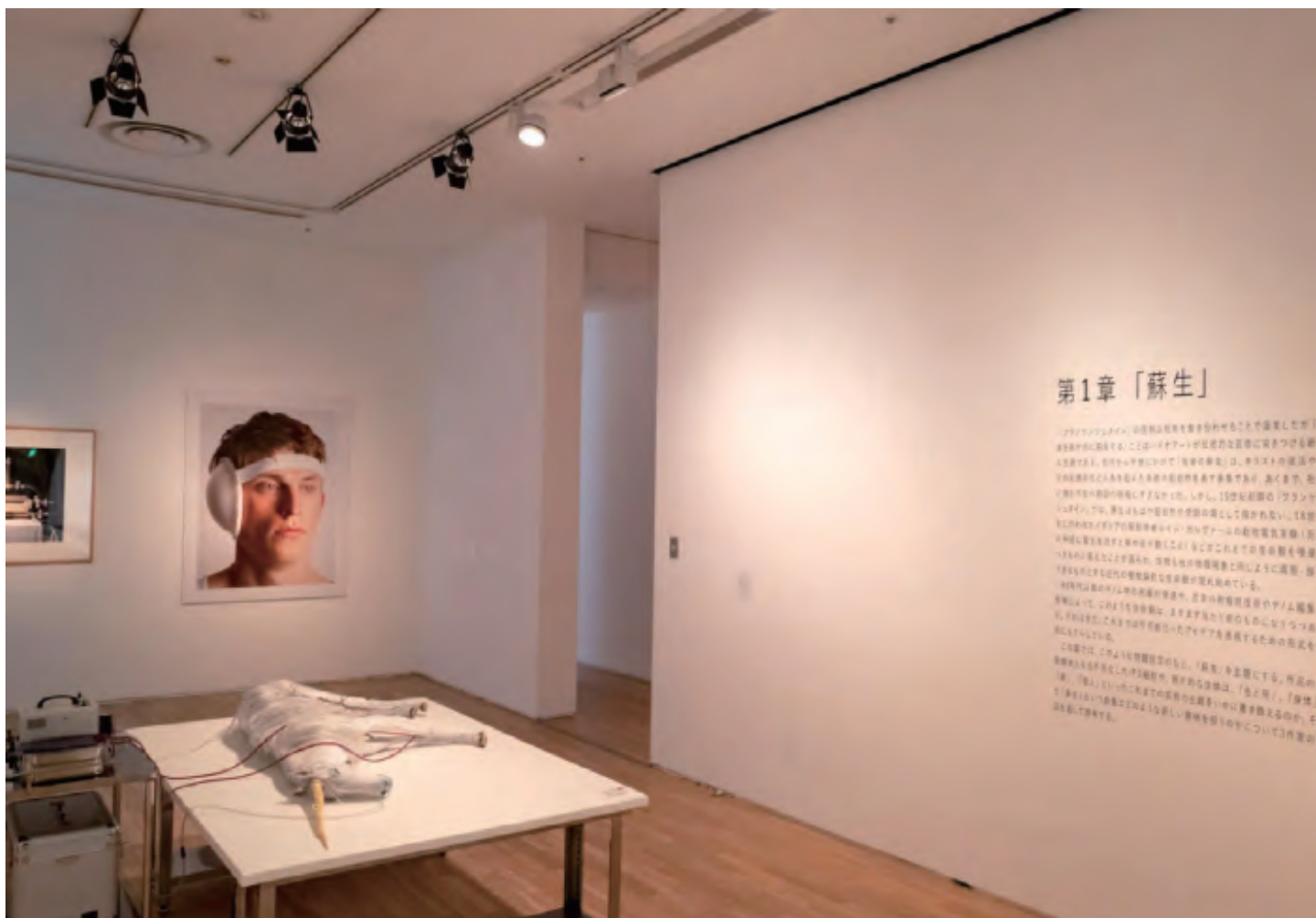
<展覧会チラシ>



<会場の様子>



<会場の様子>



レジデンス

展覧会名：アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校

公開制作：2018年8月20日～8月24日

作品展示：2018年9月26日～9月28日(岐阜盲学校)

2018年10月27日～10月28日(岐阜盲学校)

2018年10月3日～11月3日(岐阜県美術館)

会場：3331 Arts Chiyoda

概要：岐阜県美術館の企画・主催で、岐阜県立岐阜盲学校にて行われたレジデンスで、滞在制作と成果発表展を行った。

滞在中は、盲学校の児童生徒が《蘇生するユニコーンの制作風景を鑑賞したり、児童生徒と新たに作品を共作した。

成果発表として、児童生徒と制作した作品と共に、《蘇生するユニコーン》を岐阜県美術館と岐阜盲学校で展示発表した。

<展覧会DM>

表4

平野真美による、《蘇生するユニコーン》を題材にしたワークショップを行います。

① 7月22日(日)
 開催 10:30-12:00/13:00-15:00
 受付 10:30-11:30/13:00-14:30
 会場 岐阜県美術館 アートローネ ワークショップ

② 8月4日(土)
 開催 9:30-13:00
 会場 岐阜県立岐阜盲学校 オープンギャラリー

岐阜県立岐阜盲学校 交通案内
 公共交通機関をご利用ください
 岐阜駅前から、岐阜バス(無料)で岐阜市循環、加納車庫、高野線、市内山一平塚右回り、いずれかの路線バスに乗車、「北拓橋前」下車、北へ徒歩約5分。
 ※自宅用車の利用はご遠慮ください。

岐阜県美術館 交通案内
 公共交通機関をご利用の場合
 ・JR東海道本線岐阜駅 南口から徒歩約15分
 ・近鉄岐阜駅 南口から徒歩約15分
 ・岐阜バス(市内)「岐阜駅前」乗車後、107号線、徒歩約5分
 ・岐阜バス(市内)「岐阜駅前」乗車後、107号線、徒歩約5分
 ・岐阜バス(市内)「岐阜駅前」乗車後、107号線、徒歩約5分
 ・岐阜バス(市内)「岐阜駅前」乗車後、107号線、徒歩約5分

アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校 に関するお問い合わせ
 岐阜県美術館 〒500-8368 岐阜市宇佐4-1-22 TEL.058-271-1313/FAX.058-271-1315
<http://www.gifumuseum.jp> <https://twitter.com/gifumuseum> <https://www.facebook.com/gifumuseum>

表1

表2

アーティストはどのように作品を作り出していくのだろうか？
 どんな人が作っているのだろうか？
 作っている時何を考えているのだろうか？
 完成した作品を美術館で展示するだけではわからないアートが生まれる瞬間を体験できたり、時には参加することができるのがアーティスト・イン・ミュージアム(AIM)。
 今回は美術館を飛び出して、新しい出会いの中で制作を行います。

(岐阜県美術館長 日比野克彦)

公開制作 平野真美が作品を制作する様子を一般公開します。
 8月20日(月)～24日(金) 10:00-17:00
 会場 岐阜県立岐阜盲学校 図工室

作品展示 岐阜盲学校で制作した作品を展示します。
 ① 9月26日(水)～28日(金) 10:00-17:00
 会場 岐阜県立岐阜盲学校 ふれあいホール
 ② 10月27日(土)～28日(日) 9:30-15:00
 会場 岐阜県立岐阜盲学校 文化祭
 ③ 10月30日(火)～11月3日(土・祝) 10:00-18:00
 会場 岐阜県美術館
 ※会場名変更等の場合は、こちらを参照してください。

平野真美 (HIRANO Mami)
 蘇生するユニコーン、空の生物であるユニコーンなど、対象とする生物の身や内面、精神的な側面などを観察する過程や想像を基盤に制作することで、異なる空間に生物の立体構成、生物の存在、または存在に関する作品制作を行う。

1988年 岐阜県出身
 名古屋造形大学 造形学部 造形学科 視覚デザインコース卒業
 東京聖光大学大学院 美術研究科博士課程修了
 主な展覧会：平野真美展「蘇生するユニコーン」(ギャラリーマルト 2016)、高沢の園芸工芸美術 Art Award IN THE CUBE 2017(岐阜県美術館/2017)、トーキョーワンダーウォール公募2014入賞作品展(東京都現代美術館/2014)など。

Meets 岐阜県立岐阜盲学校
 2017年、視覚のために力をかけた日比野克彦校長の視覚障がい児童生徒の視覚障がい克服を支援する「AIM」(Art In My)の発起人として、高沢の園芸工芸美術研究所が、岐阜盲学校のパートナーです。

当校では、小学1年生から、専攻科の50歳代の方まで、年齢幅も視覚障がいの程度も様々な、約50人が学んでいます。視覚に障がいがあっても絵画や陶芸の制作に励んでいます。視覚障がいだからこそ感性と感覚の鋭さもあり、表現できることもあります。「AIM」での児童生徒とのコラボレーションで、新たな表現方法と芸術分野の関わりがなされることを期待します。

是非一度岐阜盲学校にお立ち寄りください。(岐阜盲学校 校長 林 亨)

表3

<滞在制作の様子>



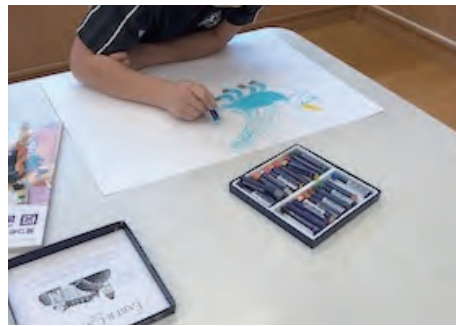
<岐阜県美術館での成果発表>



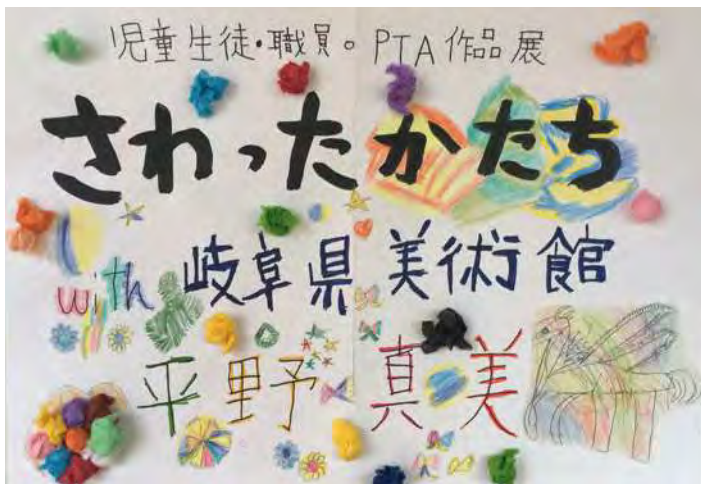
<盲学校での授業の様子>

レジデンス・プログラムの一環として、岐阜県立岐阜盲学校の図工図学・美術の授業を担当した。

初等部・中等部・高等部の児童生徒へ、鑑賞と制作をテーマに一週間の授業を実施した。授業では「蘇生するユニコーン」を実際に触れその体験を絵や文章で表現してもらい、また児童生徒の発想の元、盲学校にある素材を使って新たに架空の生物を制作した。



<岐阜盲学校での成果発表>



個展

展覧会名：平野真美 個展「蘇生するユニコーン」

会期：2018年1月12日～1月21日

会場：ギャラリーマルヒ

概要：東京都文京区根津にある「ギャラリーマルヒ」にて、2014年から制作している《蘇生するユニコーン》と、修了制作作品である《保存と再現》を展示発表した。

<展覧会チラシ>

平野真美 個展
Mami Hirano Exhibition

蘇生するユニコーン

Revive a Unicorn



2018.1.12(fri) - 21(sun)
11:00-19:00 (最終日のみ17:00)
休廊日：1.15(mon) 入場無料

Gallery MARUHI
2-33-1, Nezu, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0031, Japan
03-5832-9911
http://konoike.org/maruhi/



平野真美 個展 Mami Hirano Exhibition
蘇生するユニコーン
Revive a Unicorn



「蘇生するユニコーン」は、架空の生物であるユニコーンの骨や内臓、筋肉や皮膚など、身体の内部から制作することで非実在生物の実在を目指し、制作した肺と血管に生命維持装置をつなぎ、呼吸と血液循環を行うことで蘇生を試みる作品である。

幼い頃実在すると信じていた架空の生物は、今は実在しないと分かっている。存在を否定されたその生物は、現実世界で居場所を失い人々の脳内で息絶え絶えとなって横たわっている。作者は出来る限りの制作を行い、純真さの象徴であるユニコーンを自らの手で実在させ、心臓に血を流し肺に空気を送り息を吹き返させる。それは私達が気付かぬうちに失った夢や希望・幻想を蘇生させる瞬間である。

2017年4月に行われた「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 (岐阜県美術館)」での展示を経て、皮膚や内臓などの大部分を解体・再構築した「蘇生するユニコーン」を、その制作の元となった過去作「保存と再現」(死を間近に控えた愛犬の身体を採寸し、骨格、筋肉、毛皮を制作、肺に空気を送り呼吸をさせた)と対面させる。作者初個展。



平野真美 Mami Hirano
1989年岐阜県生まれ。岐阜県拠点
名古屋造形大学造形学部造形学科彫刻デザインコース卒
東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了
2014年 トーキョーワンダーウォール公募 2014入選作品賞 / 東京都現代美術館
2017年 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017 / 岐阜県美術館

平野真美 個展 蘇生するユニコーン
2018年1月12日(金)～21日(日) 入場無料
11:00～19:00 (最終日のみ17:00まで) 休廊日：1月15日(月)

イベント・インフォメーション
【トークショー】～ソラリスから帰っておいで～
1月13日(土) 19:00～ ※先着20名

【公開メンテナンス】
作家が自らユニコーンの調整手術を行い、内臓、器官の保守点検をします。
1月14日(日) 14:00～
20日(土) 14:00～
※料金をとりあそばさずの観覧になりますので事前の予約にご協力ください。



〒113-0031 文京区根津 2-33-1
TEL 03-5832-9911 / Mail maruhi@konoike.org

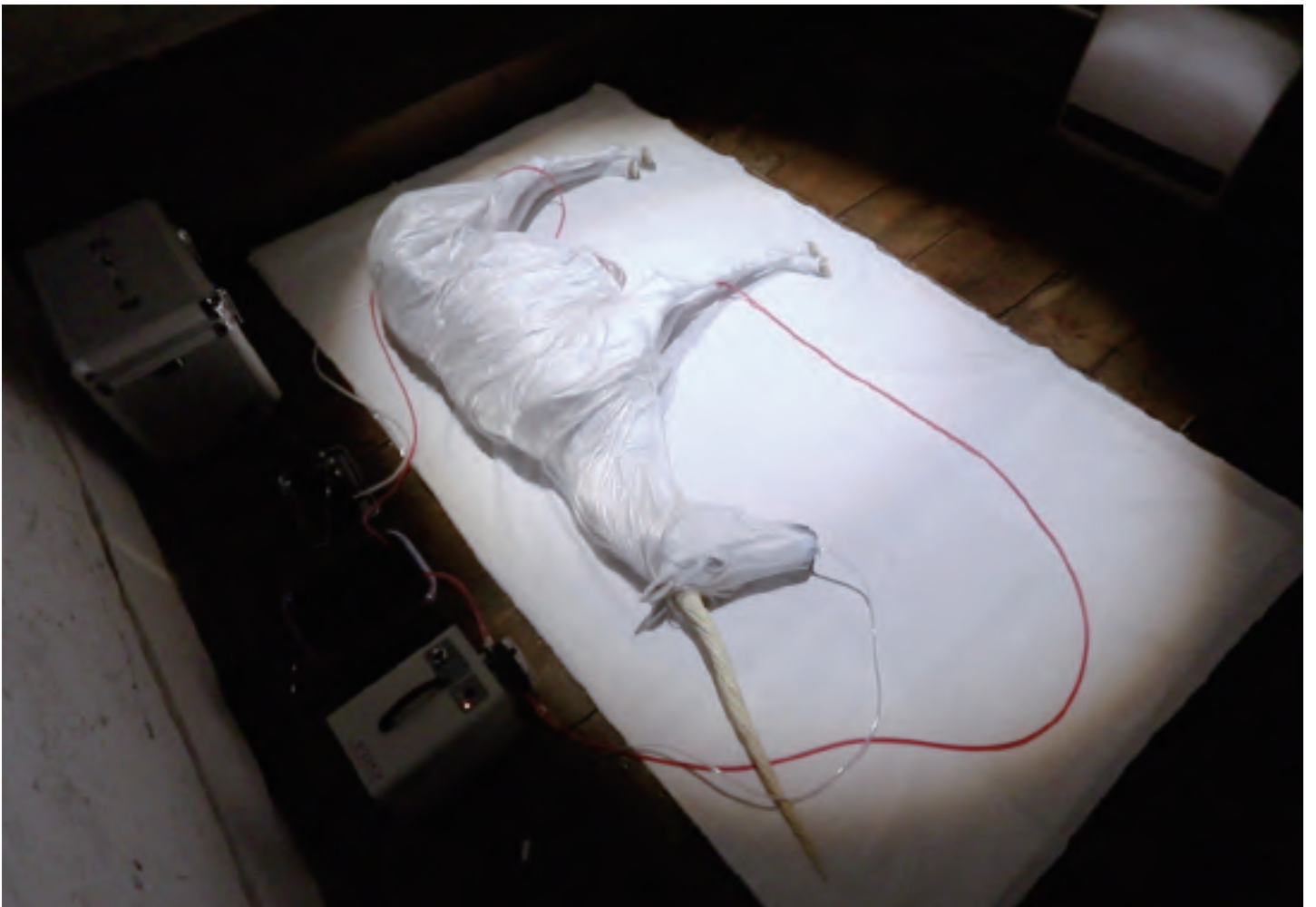
<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



<会場の様子>



グループ展

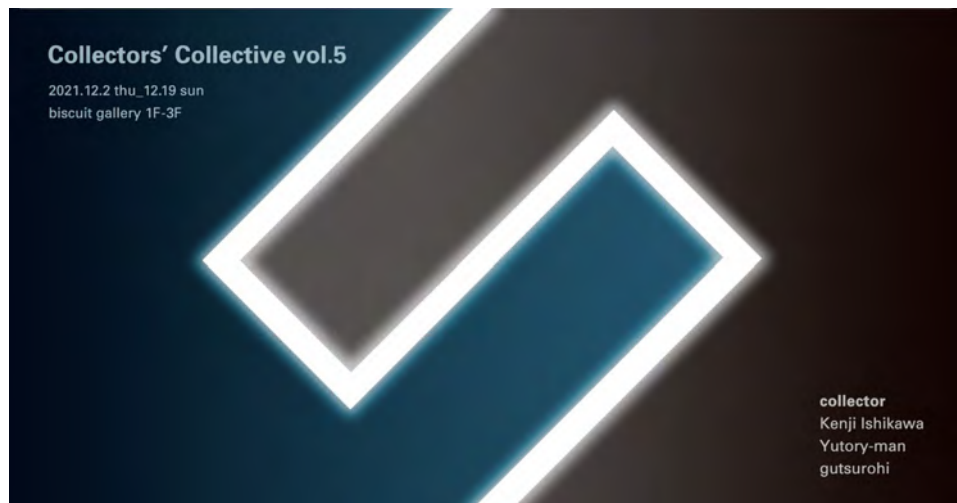
展覧会名：Collectors' Collective Vol.5

会期：2021年12月2日～12月19日

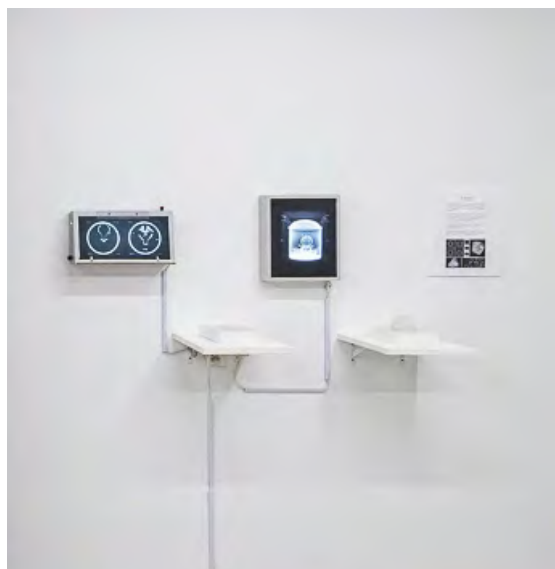
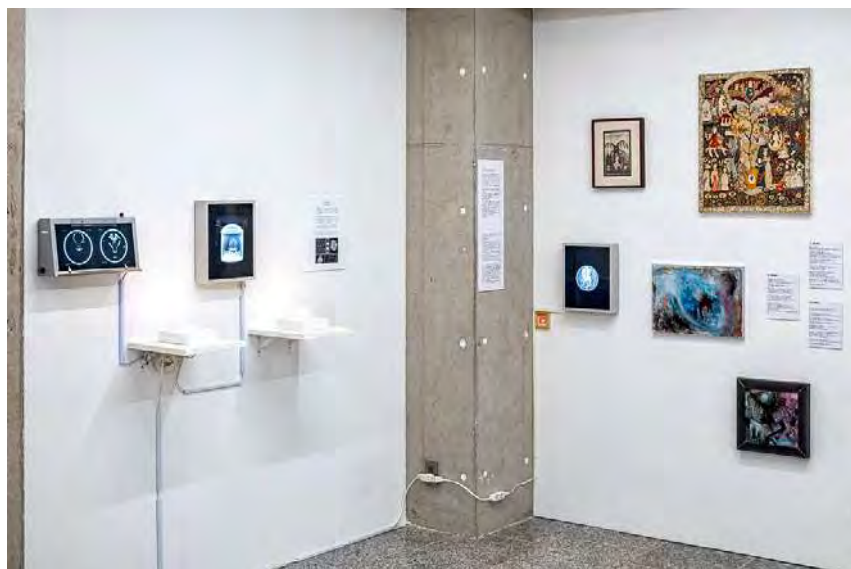
会場：biscuit gallery

概要：東京都渋谷区松濤にある「biscuit gallery」にて開催されたグループ展。コレクター3名がそれぞれのアートコレクションを披露し、コレクションしている作家の中から注目の作家を選出、その作家の新作を展示するというシリーズ企画の5回目で、2019年から制作している《変身物語 METAMORPHOSES》シリーズの新作展示を行った。

<展覧会チラシ>



<会場の様子>



グループ展

展覧会名：REN-CON ART PROJECT -連繋する現代アート-

会期：2015年2月17日～3月8日

会場：名古屋市芸術想像センター

概要：名古屋市芸術創造センターにて、舞台機構工事でホールが使用できない期間を活用して開催された現代美術のグループ展。

愛知県立芸術大学、名古屋学芸大学、名古屋造形大学の地元3芸大で、あいちトリエンナーレ2016に向けた芸術大学連携プロジェクトの一環として実施された。《蘇生するユニコーン》と《保存と再現》を展示発表した。

<展覧会チラシ>

REN-CON ART PROJECT
連繋する現代アート

February 17 - March 8, 2015
Nagoya City Performing Arts Center
Hours: 11:00 to 19:00
(until 20:00 on February 17)
Close: February 23, March 2

Organized by: THEATER∞ART REN-CON, Nagoya City Cultural Promotion Agency,
Aichi University of the Arts, Nagoya University of Arts, Nagoya Zokei University of Art & Design

2015年2月17日【火】 - 3月8日【日】 11:00-19:00 (ただし17日は20:00まで延長)
会場：名古屋市芸術創造センター 1F-4F(エントランス・ホワイエ他)
休館：2月23日【月】及び3月2日【月】 ◎入場無料

REN-CON ART PROJECT
連繋する現代アート

2015年2月17日【火】 - 3月8日【日】 11:00-19:00 (ただし17日は20:00まで延長)
会場：名古屋市芸術創造センター 1F-4F(エントランス・ホワイエ他)
休館：2月23日【月】及び3月2日【月】 ◎入場無料

ARTIST

- Aichi University of the Arts
- Nagoya University of Arts
- Nagoya Zokei University of Art & Design

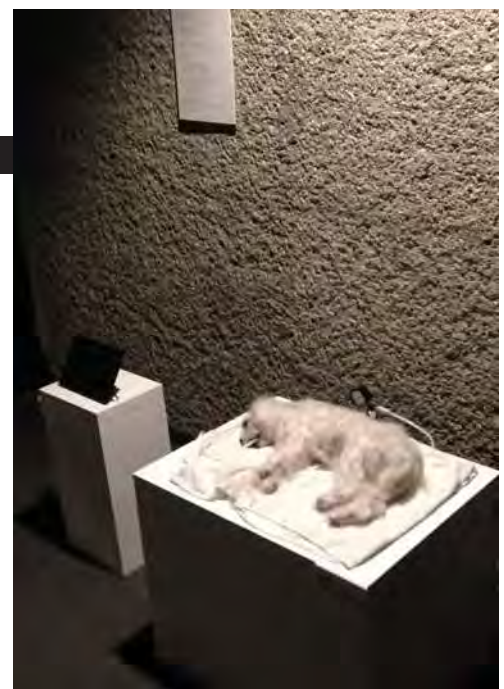
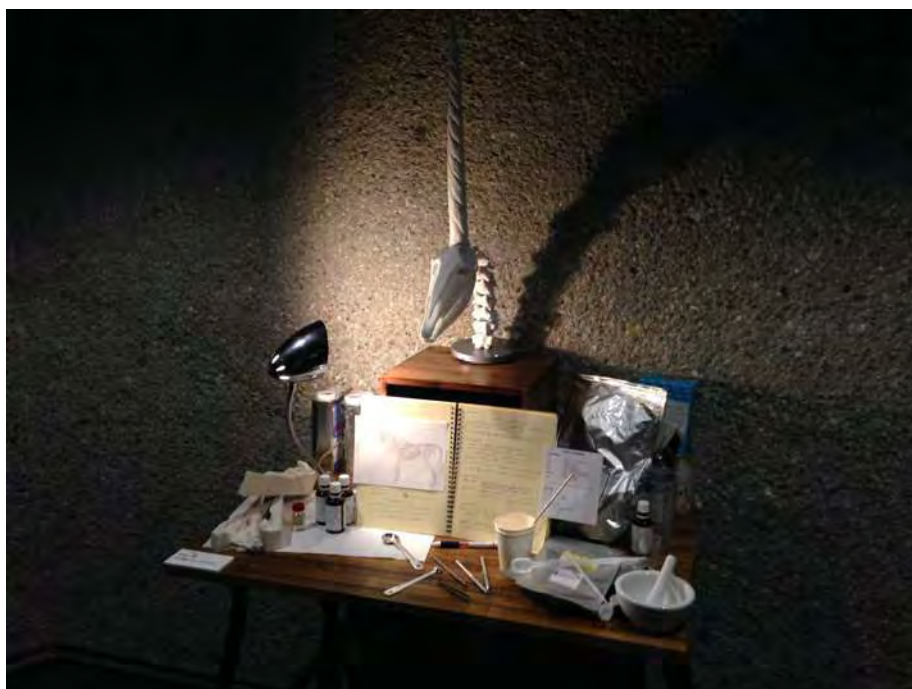
EVENT

- 2月17日(火) 19:30
- 2月21日(土) 14:00
- 2月22日(日) 14:00
- 2月23日(月) 14:00
- 2月24日(火) 14:00
- 2月25日(水) 14:00
- 2月26日(木) 14:00
- 2月27日(金) 14:00
- 2月28日(土) 14:00
- 2月29日(日) 14:00
- 3月1日(月) 14:00
- 3月2日(火) 14:00
- 3月3日(水) 14:00
- 3月4日(木) 14:00
- 3月5日(金) 14:00
- 3月6日(土) 14:00
- 3月7日(日) 14:00
- 3月8日(月) 14:00

SUPPORTING COMPANY

- 電気文化会館 ギャラリー
- 三精テクノロジーズ株式会社
- 丸茂電機株式会社
- YAMAHA ヤマハサウンドシステム株式会社
- ヤマザキマザック美術館

<会場の様子>



ワークショップ

2018～2021年に開催したワークショップの記録

ワークショップ

企画名：ナンヤローネットワークショップ「持ち主"不在"の聖書」

開催日：2021年11月28日

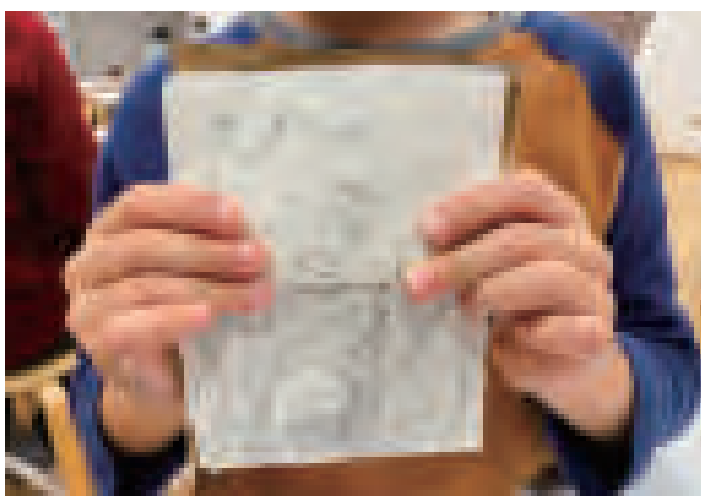
会場：岐阜県美術館

概要：企画展「ab-sence/ac-ceptance 不在の観測」の関連イベントとして、岐阜県美術館にてアートツアー（鑑賞活動）とワークショップを行った。出品した作品《変身物語 METAMORPHOSES》と、同空間に展示した岐阜県美術館の所蔵作品《黒いページのある聖書》に注目しながら、展示会場に来ることができなかった不在の誰かのために、展示会内容を伝える和綴じ本を制作した。

<会場の様子>



<成果物>



岐阜県美術館 ab-sence/ac-ceptance 不在の観測 平野真美×ナンヤローネ アートツアー

持ち主 "不在" の聖書 Whose Bible is this?

ここにいない"不在の誰か"のために、
今日見たもの、感じたことを伝える本を作しましょう。

今日、家から出て美術館に来るまでにどんなものを見ましたか？
美術館に着いてから、今この場所まで歩いたとき、どんなことを感じましたか？
これから展示会場に行くと、どんなものを見て、どんなことを思うのでしょうか。

あなたが今日見たもの、感じたこと、思い浮かんだことを、
ここにいない"不在の誰か"に伝えるための、一冊の本を作しましょう！



- ① 最初に、"不在の誰か"を思い浮かべてみましょう。今日来れなかった人や、もうここにはいない人、まだ会ったことのない未来の自分や誰か、人間じゃなくてもいいですよ。

- ② 本を作るために、色んな紙を用意しています。
机にある鉛筆と紙のセットを持って展示会場に向かいます。



- ③ 展示会場には、作品がたくさんあります。
"不在"をキーワードに、それぞれの作家が思い思いの作品を作っています。
作った人の言葉もあるし、美術館の所蔵品もあります。
展示会場にある色んなものを見て、思ったことや感じたことを紙に鉛筆で書いてみましょう。
言葉にならないことは、言葉ではなく、鉛筆の線にしてみるといいかもしれません。



- ④ 展示会場では、知ってる人にも知らない人にも、自分が何を見ているか、どう感じたか、伝えてみましょう。
知ってる人や知らない人が伝えてくれた言葉のなかから、心に残ったことがあれば、それも紙に鉛筆で書いてみます。もし、誰にも言いたくなかったら、その気持ちを紙に書いて誰にも見せずにいってください。



- ⑤ 展示会場から戻ったら、紙に書いたことを見直したり、誰かと見せ合ったり、一冊の本にするために、順番を考えたりしましょう。他の人と、紙を交換するのもいいですよ。何も書いていないページがあっても、それはそれでとても良いものです。さらに好きな紙や表紙を選んで、1冊の本に綴じます。美術館のスタッフに表紙と紙を渡して、針と糸で本を綴じてもらえば完成です。



<どうして本を作るのか?>

「ab-sence/ac-ceptance 不在の観測」展に展示している荒木高子さんの「黒いページのある聖書」は、荒木さんの亡くなったご兄弟の遺品の聖書がモチーフになっています。

私はこの作品を初めてみたとき、聖書のページが開いた状態にしてあることが気になりました。

前述の通り、遺品の聖書がモデルとなった「黒いページのある聖書」は、持ち主不在の聖書と言えます。

そこで私は、この聖書は"不在の誰か"のために、常に開かれた状態にあるのだと思いました。

今ここにいない人がいつこの会場に来て読めるように、目に見えないだけでここにいるかもしれない誰かのために、その聖書は常に開かれているのかもしれない。(これは私の一解釈なので、正解ではないし、正解があるかもわかりません。作家の意図するところと作品は必ずしも一致しませんし、作品解釈はいつでも誰でも自由です。)

不在の誰かを思いながら、この聖書のような本を作りたいと思い、このアートツアーを考えました。



ワークショップ

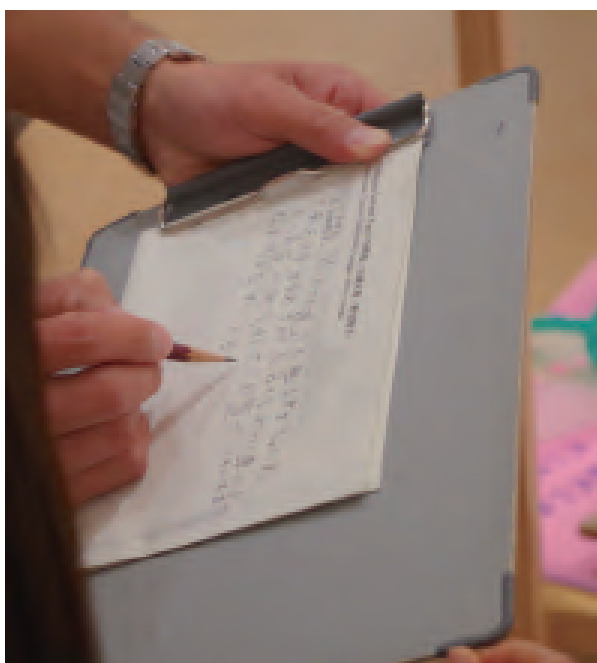
企画名：ナンヤローネットワーク「持ち主"不在"の聖書」

開催日：2019年12月22日

会場：岐阜県美術館

概要：岐阜県美術館での企画展「セカンド・フラッシュ」の関連イベントとして、オリジナルの鑑賞プログラムを企画した。小説等で用いられる、読者が語り手が語った内容を鵜呑みにしてしまう読者の認識を使った叙述トリック「信頼できない語り手」をキーワードに、参加者自らが「信頼できない語り手」となって展示作品を互いに解説しあうアートツアーを実施した。

<会場の様子>



岐阜県美術館 ナンヤローネアートツアー × 平野 真美

信頼できない語り手



信頼できない語り手 (Unreliable narrator) とは

小説や映画、劇などで用いられる手法であり、前提条件として提示される文章は地の分や形式において無批判に鵜呑みにしていいという認識を逆手にとった叙述トリック。(注1) 読者自身は、物語の語り手はそこで起こったありのままの真実を語るものだとして最初認識しているが、物語の語り手が語る内容が実は真実と異なり、読者を惑わせミスリードする。

注1: 小説という形式自体が持つ暗黙の前提や、偏見を利用したトリック。

○今日のアートツアーでは、この叙述トリックを美術館のフォーマットへ置き換えてみます。

一人称の語り手は「信頼できない語り手」です。作家は主観で話すため、作品にとって一番の「信頼できない語り手」であるといえます。では、展示室にある、挨拶文、ハンドアウトや展示室内の三人称で語られる文章が「信頼できない語り手」によるものとしたら、作品の捉え方はどう変化するでしょうか。"人間は日常的に触れる情報のうち8割を視覚から得ている"といえます。8割のうち作品にとっての真実をどれほど受け取れているのでしょうか？

ナンヤローネアートツアー 「信頼できない語り手」の始め方

1. 自らが”信頼できない語り手であることを自覚しましょう
2. フィクションであることを保留し受け入れましょう
3. 誤読行為を楽しみましょう

<アートツアーの手順>

- ① 今ある作品情報の一切を無視し、事実と異なるとんでもない設定を作品に組み込み、その考えをハンドアウトに書き込みます。(お渡しするハンドアウトは、作品情報部分が空白になっています。)
- ② できあがった「信頼できない語り手」によるハンドアウトを、他の参加者に渡します。
- ③ 「信頼できない語り手」である他者が作ったハンドアウトを元に、もう一度展示室で作品鑑賞します。
- ④ 最後にハンドアウトを作ったグループの作品設定を聞き、そのハンドアウトを見ながら作品鑑賞したグループの感想を聞きます。
- ⑤ 困った時は美術館の皆さんに作品について聞いてみましょう。しかし彼らもまた「信頼できる語り手」とは限りません。

誰か他の人を騙したり、嘘を暴いたり、問いを解くことが目的ではありません。展示室で与えられた情報を信頼しないとして、作品の関連情報から自由になり、別の視点を(なかば強制的に)持つこと、そうすることで作品解釈の幅を広げること、作者さえ知り得ない作品の新しい見方を発見することが目的です。作者ではなく、作品の前に立った誰もが、作品自身が信頼できる語り手になることができます。作品と自分だけの関係をつくり、誤読行為を楽しみましょう。それが作品にとっての真実かもしれません。

『青白い炎』ウラジーミル・ナボコフ著、1962年発行

架空の詩人ジョン・フランシス・シェイドによる瞑想詩『青白い炎』と、その詩の膨大な注釈と索引からなる"小説"。注釈者はシェイドと同じ大学に勤め、シェイドの隣人でもあるキンボート。詩の完成後シェイドが亡くなりキンボートが詩の注釈と編集、出版を名乗り出るが、キンボートによる注釈は詩の内容から大きく逸脱・脱線し、彼の奇怪な幻想や妄想によって歪められている。シェイドに妄執し、詩の内容に無関係の自らの人生を無理やりこじつけようとするキンボートにとってその「誤読行為」は、特別なリアリティを想像することに他ならない。“そうした別世界(それは異界への関心とも通じる)の創造を通じて得られる美的至福が、深い喪失感から生じる恐るべき孤独と苦悩の現在を少しでもやわらげ、軽減してくれるのではないかと希求する。(略)そんなとき、彼が狂人であるなどということはほとんど問題ではなく、彼を通じて、われわれはしばしば創造者や芸術家の姿を垣間見ることになるのだ。言い換えれば、キンボートの幻想や妄想は明らかに文学的想像力の別名なのである。”

(ウラジーミル・ナボコフ『青白い炎』ちくま文庫、2003年、訳者あとがきより抜粋)

ワークショップ

企画名：ナンヤローネワークショップ 蘇生するユニコーンと物語る

開催日：2018年7月22日

会場：岐阜県美術館

概要：岐阜県美術館で行われたワークショップ。岐阜県美術館多目的ホールにて《蘇生するユニコーン》の公開制作を行い、参加者は公開制作を鑑賞しながら思いついた物語を原稿用紙に書き連ねた。実施後は参加者が書いた物語を互いに共有した。

<会場の様子>



ユニコーン召喚 / 喚起のための 蘇生するユニコーンと物語る

- 仮定 a, ユニコーンは物語世界に存在する
b, ユニコーンが存在するのは物語世界である
c, ユニコーンが存在する場所は物語世界である

ワークショップを始める前に伝えること

今日この場所に来たあなたには、ひとつ物語を書いて頂きたいのです。

机の上に原稿用紙が置いてあります。その原稿用紙に物語を書く、ここで言うことはそれだけです。

会場を見回して、いくつかの机の中心の、ユニコーンの前に座っている人が、これを書いている私です。

ここはなんだかおかしな空間。

ひどく痩せたユニコーンが横たわっています。

上の3つの仮定によれば、ここは物語世界です。ユニコーンによってこの場所は、現実世界から物語世界へとささやかな場面転換を起こします。

朝起きて、今日は美術館に行こうと決め、ここまでやってきたあなたの日常と、その日常から少し離れた物語世界が繋がってしまいました。

少し離れたと言いましたが、この物語世界が少しずれているのは、ここで行われる行為がいわゆる生活に必要な、生きるために必要な、衣食住のどれにもあてはまらない、特に大きなお金も生まない、社会とは少し違うことが重要になる世界だからです。

今日ここで作る物語は、自分が暮らしている世界から少し離れた、自分だけの深い洞窟のような世界です。

その暗がりに目を向けて、自分だけが知ることができる世界を見つけて、それを原稿用紙に書いてください。

物語の形式は自由です。ジャンルも自由。しかしひとつ注意したいのは、「感想文」にならないこと。今日この場では、思ったことをそのまま伝える必要はありません。なにか感想を持ったとしたら、それをそのまま書くのではなく、あなたの作品として、自分だけの物語世界に繋げてください。あなたは今鑑賞者ではなく作者です。

このワークショップでは、特に会話は必要としません。他者とのコミュニケーションは一度脇に置いてください。(それでも嫌でもついてまわりますが)。

必要なのは自己埋没です。Focus on it!

他のことは一旦忘れて、自分本意に集中してください。

それで困ることがあれば、(荷物や邪魔とか、周りが気になるとか) スタッフに伝えてみてください。

私は話しかけられても特に会話しません。顔も見ない、どんな人がいるか、それも知ろうとしません。あなたが書いた物語上だけであなたを知るためです。

ここで書く物語は、今後何かになるためのものではないし、特に知識も技術も上手く書く必要もない、本当にただの原稿用紙上の文章です。特別なテクニックや世界観も必要ありません。 ↗

ただ、面と向かって話し合ったり、目を合わせたり、そういったことではないコミュニケーションを、お互いの空想のなかで行いたい。作られたものからお互いを知りたい。普段のあなたから少し離れた、あなたが創作した物語世界によって、お互いをより知ることができるかもしれない。他者を遮る自己埋没によって、より深く自分や他者を知ることができるかもしれない。

物語世界にはユニコーンがいます。私は物としてユニコーンを実在させ蘇生していますが、あなたが書いた物語世界や他の人が書いた物語世界は繋がっているのです。例え直接的な描写がなくとも、そのずれた世界にユニコーンが姿を表すこともあるでしょう。

そしてあなたはユニコーン召喚に成功します。

なんだか楽しくなってきました。今日この時代、この場所に来た人たちで、どんな物語が原稿用紙の上に広がるでしょうか？

「物語を書く」と言われ、「げっ」と思ったあなたも、とりあえず、やってみてください。私は物語を書くプロではないし、ここに優劣はありません。起承転結も必要不可欠ではありません。短い詩のようなものでもいいはず。

では、まず一行目を書き始めましょう。

最初の言葉には躊躇するべきです。

何かを生み出そうとするとき、あなたは何かを生かす感じがしますか？それとも何かを殺す感じがしますか？

それでもまず一行目を書き始めましょう。

そこはどこですか、いつですか？

だれがいて、だれがいない？何をしていた、何をしていない、黙っている、話している、だれに向かって？

あなたはここにいて、でも本当はどこにいますか？

2018年7月18日

平野 真美

2018 7 21

大変、手で書いたニコニコが倒れてる！
 さ。と車輪でかざはなけりゃ倒れるよ。
 なんだから天候様な手綱を引てるが、悪い
 病気がんだらう。ニコニコに空想の生
 き物なんだから。病気をしなすれ、死にま
 なるんと思ってる。大限遠いニコニコ
 ンにも承い致が流れてた。
 じき一瞬なんの病気がなんだろう。地面に
 降りたらしんじい病にかまされたい。想像の
 中ニコニコは、空を飛べた上を駆け回る。
 べたような気がする。だから迷子になっ
 突然地上に降りたニコニコの子は、ま
 かの転さと空気の濃さに気がくせりし倒れて
 しま。たんだ。ここが助けてもらって、い
 れて。私たちが世界で治るのがある。治
 成卿八日序あるのがある。これがど
 きまのたろう。もろかしたる。まじ地
 橋渡し程になるのかもしれない。無事に治
 た。おなりの場所へ連れて行く。

おま

かんになったら
 しよ
 まきーはく
 いこね
 いっしょに
 あそぼね
 いっしょに
 おさるさん
 みよね

メディア掲載

新聞・雑誌などのメディア掲載の記録

雑誌掲載

雑誌名：芸術批評誌REAR 47号 コラム掲載

発行月：2021年11月

発行元：リア制作室

概要：特集「記録と再生の倫理学」内で、コラム「死者と記憶の保存作業」を執筆、作品画像と共に掲載された。

<表紙>



<掲載面>

Columns by artists
+
死者と記憶の保存作業
+
平野真美
HIRANO Mami

平野真美(家屋物語 METAMORPHOSES #4 Ceramic) 2021年

2013年に制作した「保存と再生」は家屋で緩和ケアを受けながら暮らしていた病気の夫を、その身体の内臓を煮り、骨髄や脂肪、皮膚や臓腑を作り、コンプレッサーで肺臓に空気を送り、今も生きています家を断つことによって保存しようとした作品だった。

今の姿を模したい。眼前の景色を誰かと共有したいと思うのは、ラスコーの洞窟壁画の頃から共通した人間の根源的欲求だと思う。私は当時、病せて肋骨の形が浮き出るほど弱々しく、しかし呼吸を続ける犬の、その生き生きした呼吸こそ美しく思い、身体の内臓からその姿を保存したいと制作していた。

展示をすると様々な人が、最近家族を亡くした話や家屋を看崩しているという話をしてくれた。別荘の私に個人的な話をしてくれることに驚いたが、むしろ距離が近い人ほど話しにくいことなのかもしれない。死者や死者についての話は日常会話でタブー化されたり、あるいは言葉や筆のようなものにすり替えられている感じもする。「社会に少しずつ死者が定住しなくなる」とはゾロドリヤールの言葉だ。

人は「保存と再生」を制作せよとなり、その過程は家屋の居間に置いてある。夫葬の日から家の中は様々な変わりしたが、夫葬の日の空気が変わらなず居間に残っているような気がする。私は骨盤の中を覗きしても見たかったが、開けてしまったらその前には見れないように、軍隊に許可を得て骨盤が入った骨箱とCTスキャンを撮ることにした。スキャンデータも3Dモデル化してDプリンタしたものを彫型に、ガラスや陶に変容させ元の身体の通りに置いていく。その変わっていく姿を受け入れることができれば、私は豊田や私自身の変化を受容することができると思う。これは、死者と隣り合わせるための私の葬法でもある。

制作の最初はCTスキャンデータをPC上でコピー＆ペーストでどこどこと変換されたが、今はガラスや陶での制作が進んでいる。ガラスでまた造像はその滑らかさや内面のテクスチャーも再現しており、その艶やかさや頭の小ささに、当時の息する姿を思い返した。

雑誌掲載

雑誌名：美術手帖 令和3年2月号 掲載

発行月：2021年1月

発行元：カルチュア・コンビニエンス・クラブ

概要：特集「2020年代を切り開くニューカマーアーティスト100」内で、作品画像と選出者による紹介文が掲載された。

<表紙>



<掲載面>

MAMI HIRANO

平野真美

◎1989.GIFU

平野の作品は、いつも死と向き合い、それに抗うことで、我々がいまをいかに生きるのかを指し示してきた。骨格、臓器、血管、皮膚、毛、眼球などが解剖学に基づき脅迫的なまでの精度で再現されることで、死に近づいていく寝たきりの愛犬の「記憶」や、科学によって殺されたユニコーンという「迷信」が、生々しい現実味を帯びる。それは、現代哲学における思弁的実在論的な転回——世界が真に存在するかどうかはとらえ方にすぎない。ゆえにすべては実在する——を隠喩するだけでなく、テクノロジーに支えられた現代の「生と死」に私たちはいかに向き合うのかを問いかける。(高橋洋介) | ◎

2014年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了。1月8日より3331 Arts Chiyoda1階3331Galleryにて個展開催。

上——蘇生するユニコーン 2014— 樹脂、シリコン、毛、電動ポンプ、エアコンプレッサーほか
165×138×50cm Photo by TooruTsuji
下——変身物語 METAMORPHOSES #1 X-ray film 2020 レントゲンフィルム、シャウカステン
63×48×8.5cm

新聞掲載

掲載誌名：岐阜新聞文化面 インタビュー掲載

発行日：2021年11月17日

発行元：岐阜新聞

概要：令和3年11月17日発行の岐阜新聞文化面にて、作品画像とインタビューが掲載された。

<掲載面>

第3種郵便物認可

岐 阜 新

県美術館 企画展
「ab-sence/ac-ceptance
不在の観測」

県美術館（岐阜市宇佐）で開催中の企画展「ab-sence/ac-ceptance 不在の観測」で、岐阜市の現代美術家、平野真美さん(31)が「変身物語 METAMORPHOSES」シリーズの立体、映像作品を出品している。愛犬の遺骨を扱う作品群の根底にあるのは、「不在」を確認することで死者と真摯に向き合う姿勢だ。（大堀瑠美）

現代美術家 平野真美さん（岐阜市）

死者と真摯に向き合う

平野さんは1989年水戸市生まれ。岐阜市在住、戸市生まれ。岐阜市在住、2014年東京芸術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。愛犬や空想上の生物ユニコーンを題材に、骨や皮膚などの身体部位を人工的に再現すること、生命の保存や蘇生について探求している。19年には県美術館の企画として、岐阜盲学校（岐阜市）



愛犬の遺骨再現「不在を確認」

企画展「不在の観測」で「変身物語」シリーズを出品した平野真美さん
岐阜市宇佐 県美術館

で滞在制作をした。「変身物語」シリーズは18年から制作。きっかけは愛犬の死だった。火葬後、遺骨を入れた骨つぼを美家の居間に保管した。家の中は時とともに変化していく一方、骨つぼだけは忘れられたかのようにそのまま置かれ、愛犬を思い出さずとも減っていったという。そこで、火葬時に触れた小さく美しい遺骨を、骨つぼをCTスキャンすることで可視化しようと試みた。展示するのは骨つぼを上と横から撮影したエクス線写真4枚と、写真をつなげて47秒の映像にした作品。骨つぼの中にある遺骨の形がくつきりと映し出される。さらに、CTスキャンを基に3Dデータを作成。3Dプリンターで樹脂製の遺骨を出力し、それを原型としたガラスやセラミックの立体作品も制作した。初めて取り扱ったというガラス

は、型の中で溶融して成型する古代の鑄造法。パート・ド・ヴェールを用いることで、遺骨の薄さ、表面、裏面の形まで忠実に再現することができた。これらの作品は、死者をよみがえらせるのではなく、死者を死者としてなるべく感傷的にならずに受け止めることを促す。「犬の姿を作品にしているが、制作中は常に犬の不在を感じていた。形になってまた現れても、不在であることに変わりはないが、死者を死者として、死者のまま関わり続ける方法を探したい」と平野さんは語る。さらに、同館所蔵の、荒木高子氏の陶磁作品「黒いペーシ」のある聖書（1986年）も展示。これらを通じて平野さんは「日常の中で死者への接し方、不在の者に対する向き合い方が変わるかもしれない」と話した。平野さんは28日午後2時から同館で「ナンヤローネアートツアー」を行う。展覧会鑑賞後、参加者各自が心のよりどころにしている「不在の存在」をイメージし、荒木作品の聖書にちなんで、手作りの小さな本に書き込む。参加無料、定員12人。22日までに同館ホームページの専用フォームから申し込む。

新聞掲載

掲載誌名：中日新聞夕刊文化芸能面 インタビュー掲載

発行日：2021年9月27日

発行元：中日新聞

概要：令和3年9月27日発行の中日新聞夕刊文化芸能面内のコーナー「美の新星たち」にて、作品画像とインタビューが掲載された。

<掲載面>



愛犬の遺骨の形を再現し、繊細なオブジェや幻想的な写真へ「変身」させる。美術家平野真美さん(三)の「変身物語 METAMORPHOSES」は喪失に真摯に向き合った作品だ。生命の宿っていた時とは、異なる素材や見せ方で提示する。透き通る骨や断片的な画像の中に、失われたものと残ったもの、変化と不変が交錯する。

不在に向き合う物語

平野真美さん

「火葬した時、りんちゃんのお骨がきれいだったと思った」と平野さん。想像以上に緻密だったという骨の美しさを再確認しながら、変身させる。愛犬がいなかった時間の中で変わる自身や環境を受け入れるための「葬法」であり、亡き存在と関わり続ける行為でもある。

透明な骨は、型にガラスの粉末を詰めて焼く古代メソポタミア発祥の技法「パート・ド・ヴェール」で制作している。外観だけでなく厚みや内部の微細な凹凸も再現できると考え、初めて取り入れた。現代の科学と古代の工芸の融合で、生命を支え



「変身物語 METAMORPHOSE S #3 Pâte de verre」(部分)



ひらの・まみ 1989年生まれ。名古屋造形大卒業、東京芸術大大学院修了。2017年の「清流の国ぎふ芸術祭」で入選。「変身物語」は、岐阜県美術館(岐阜市宇佐)の企画展「ab-scence/absence」(10月1日～11月28日開催予定)で展示。岐阜市出身、在住。

た造形に迫る。

愛犬はいつも創作の重要な位置を占めてきた。「初めて作品と呼べるものができた」と振り返る大学院の修了制作では、愛犬を生かしている体の仕組みを再現し、保存しようと似姿のオブジェを作った。その死に打ちひしがれた後、「夢や希望の象徴である動物の息を吹き返すことができたなら、自分の感情も蘇生できるのでは」と始めたのが「蘇生するユニコーン」。馬に似た架空の生物ユニコーン(一角獣)を、実在の動物のように精巧につくる。樹脂などで骨、筋肉、内臓を成形し、生命維持装置を模した機器にないだ。

内臓をむき出しに横たわる姿は生々しく、グロテスクにも映る。「美しさだけでなく、禍々しい逸話もある生き物」。美と醜、幻想と現実、生と死…。相反するイメージをたたえる。今後は「変身物語」を経て深めた動物の骨への理解を、ユニコーンの造形に反映させるつもりだ。

平野さんの創作には「不在」への関心が通底する。コロナ禍での気掛かりも、「オンライン重視の生活で直接の交流が難しく、他者への想像が及ばなくなってしまう」ことだ。「誰かや何かの不在を考へることが、いないとされてきた誰かを思う力になるという希望がある」

(谷口大河)

TV出演

番組名：ブレイク前夜～次世代の芸術家たち～

放送日：2018年3月18日

放送局名：BSフジ

概要：国内の若手作家を紹介するBSフジのテレビ番組に出演し、作品について紹介した。平成30年3月18日放送。

<番組の様子>



ラジオ出演

番組名：きょうもラジオは!?2時6時

放送日：2021年10月13日

放送局名：ぎふチャンラジオ

概要：ぎふチャンのラジオ番組「きょうもラジオは!?2時6時」内のコーナー「耳で楽しむ美術館」に出演し、作品と開催中の展覧会について紹介した。令和3年10月13日放送。



ラジオ出演

番組名：お茶の間ステーション

放送日：2019年7月10日

放送局名：ぎふチャンラジオ

概要：ぎふチャンのラジオ番組「お茶の間ステーション」に出演し、作品と開催中の展覧会について紹介した。平成30年7月10日放送。

<番組の様子>



チヂミするユニコーン たかやま しおり
しんぞうがちみちだ。た。けがふわふわでさわりたいくらいだ。た。ちがちみちとこわかった。つのがめ、ちがながかった。またしはゆにこーんをだいきにな。ちまた。ゆにこーんのせなかのりたけつた。ゆにこーんはめをとじていた。ゆにこーんのしんぞうがうごいた。いきをしてるのかわかておもった。さいしよはしんぞうはうごいていなか。た。ちがうごいていた。

だいの上に白いユニコーンがたおれていきす。さかいら血がながれていきす。なんでたおれていのか？かわいそうにな。てまました。まじよがし。じつしたら生きがえるのか？
白いユニコーンが目をあけました。つぎは足がうごきました。そして立ちあがりました。白いユニコーンは、元気に走りましました。きれいな森の中へ帰り、きょうだいに会えました。おにこ。このように走りまわ。たり、川の水をのんだり、楽しんでくらせますように。
まじよは、どうや。て生きがえらせたのだらう？まじよの薬をつが。て生きがえらせました。血の中にまじよの薬をまぜてさかいかう体におくりました。
やさしいまじよだ。たから、ユニコーンは生きがえりました。まじよだからできること。それがまじよ。

書籍掲載

図録、カタログなどの掲載記録

図録

書籍名：ab-sence/ac-cept 不在の観測

発行月：2022年3月

発行元：岐阜県美術館

概要：令和3年10月に岐阜県美術館で開催された企画展「ab-sence/ac-cept 不在の観測」の図録。

《変身物語 METAMORPHOSES》を展示した会場風景の他に、会場に掲示したテキスト3点や作者略歴、展評等を掲載。

総頁数94頁。作品掲載部分54頁-72頁。

<表紙>



<掲載面>



【黒いページのある聖書】

「黒いページのある聖書」は、荒木高子の亡き兄弟の遺品である旧字体の聖書をモチーフとした「聖書」シリーズのうちの一作品である。作品は、例えば石や木から聖書の形に削り出すのではなく、本そのものを細くして一ページずつシート状の円柱を並べながら、本の形を作っている。そのページにはスラスターンによって聖書の文字が転写されている。

「黒いページのある聖書」と自作である「変身物語」のシリーズには、その制作の発端や作品のテーマにいくつか似た要素を見つけることができた。

例えば、家族が亡くなった後その君にまつわる何かをしていること。一つのモチーフで方法を変え何作も作っていることなど。

特に気になったのは、自分自身でまた別の形を一から作るのではなく、聖書や遺書のように作品の形を他のモチーフによって決めている点である。

しかし、私がCTスキャンや鋳込みなどの技術を使い遺骨の形をなるべく忠実に再現しようとしているのに対し、「黒いページのある聖書」では、遺品の聖書にはおそろくなかったであろう「黒いページ」が穿し込まれている（もしくは元の聖書から該当ページの情報が差し引かれていた）。私は「変身物語」のシリーズで、なるべく自身の手紙を残さず素材の質いや制作過程でどうしても発生する痕跡だけが残るように意識している。作家として重要な「形」の要素を大から削っている中で、それに忠実に従いこそすれ意図的に違う要素を入れ込もうと思ったことはなかった。では、私の意図で遺骨に何か差し込む、または差し引くとしたら、どうだろうか。与えられた形に欠損を加える、無い状態があるようにする。そういう言葉遊びのようなことを考えると、陶器が壊されたレリーフが思い浮かび新たに作品を制作することにした。



23

94

【変身物語】

間柄の本2013年に亡くなった夫の遺骨は、火葬の後に納骨せず、洗車の屑屑に覆われてある。火葬の罪、家族と離れた小さく美しい遺骨をもう一度見たいが、骨壺の中には当時の喪気が溜まっているようで、その蓋を開けることはできなかった。

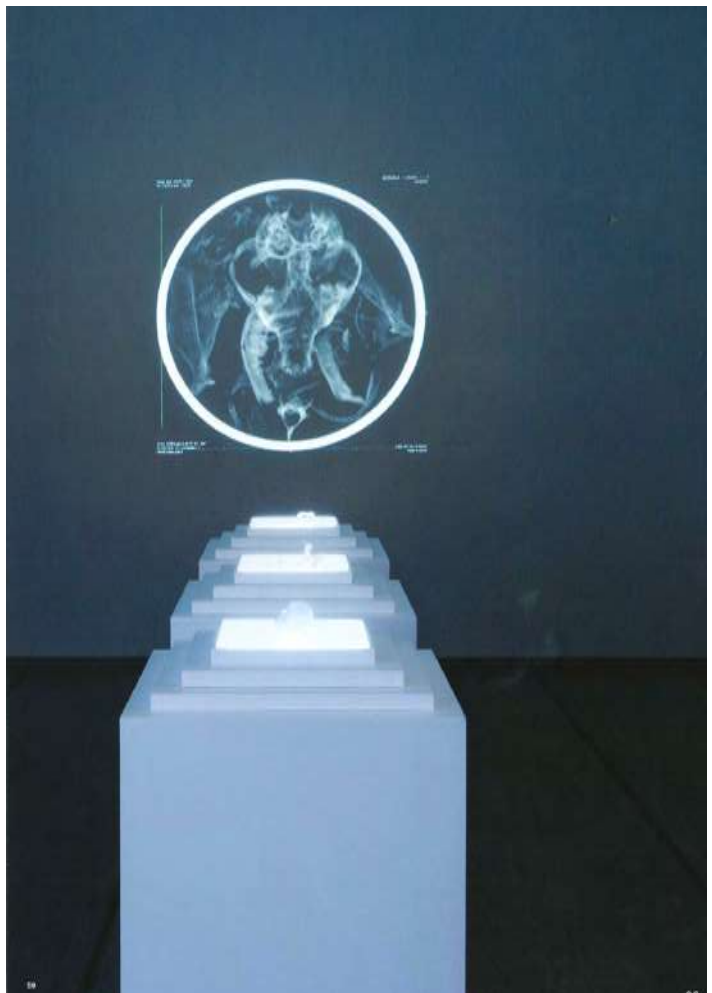
私は2018年のある日、骨壺が入った骨箱ごとCTスキャンを撮ることにした。スキャンデータを元に遺骨の3Dデータを作成し、3Dプリンターで出力する。出力した樹脂製の遺骨を原形として、古代のガラス焼造法であるパート・ド・ヴェールや陶による鋳込み成形などの技法を通し、変形はそのままに様々な素材に実装させていく。

死を境に失うものばかりだった世界に離れる一切が、これを境に増殖していく。様々な素材に融け美しさをそのままに実装する姿を見て、私は私自身の変化も受容できるように思えた。

現代の葬制は死を日常生活から遠ざけ、やがて死者は社会に実在しなくなった。重い墓石のなか、骨壺のなかで置かれた死者を、私の葬法で繰り返し変身させ、私は死者を失わない、その変身の過程を見せる物語である。

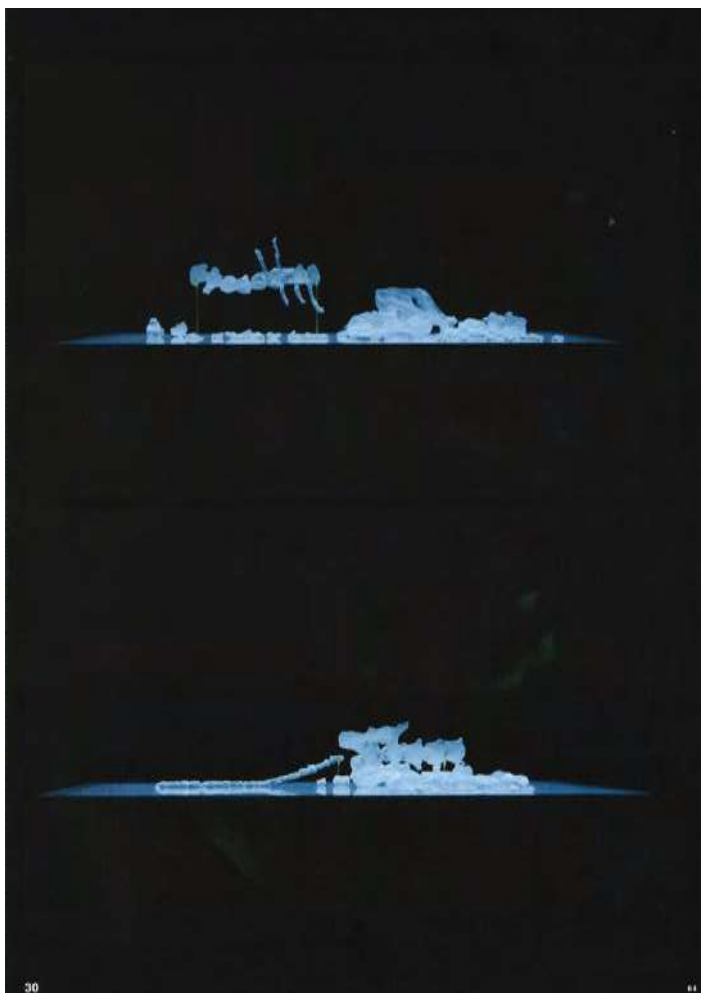
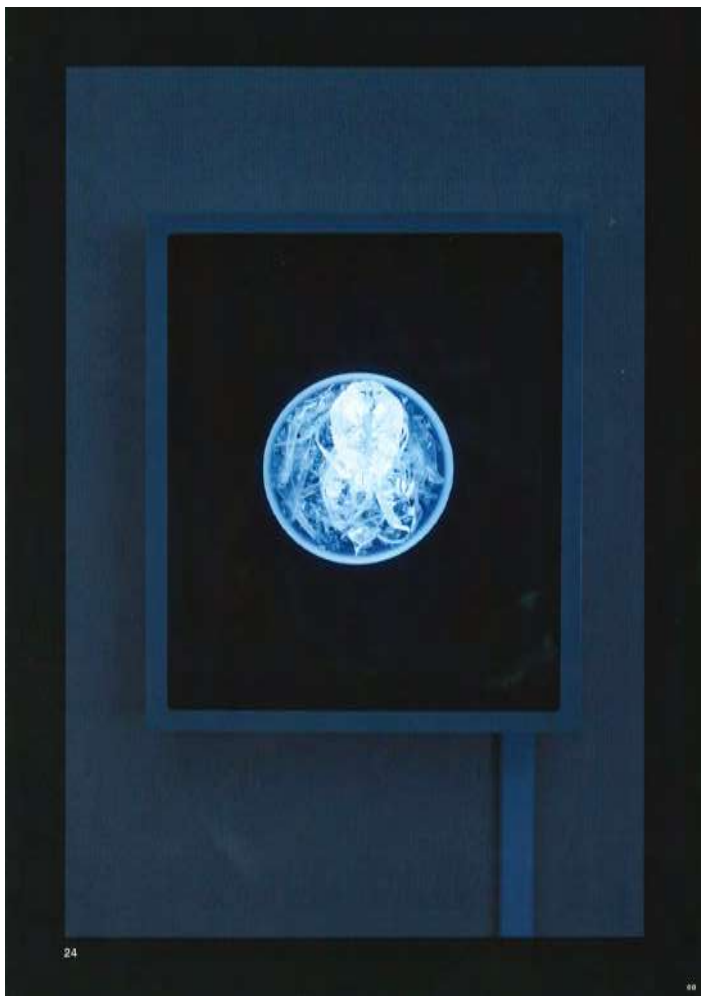
制作中、焼成が終わった窯の扉を開けると、制作途中の作品が置いてある作業机に居る時、もう夫は「いない」のだということを感じて確認していたように思う。不在の存在に何かをみると、不確定な何かが立ち上がってくるようでそれを信じた気持ちにもなるが、この不在の確認作業は死者が幽霊や魂などの存在としてではなく、死者を死者のまま、死者として関わっているような感覚があった。死者を蘇らせたいわけではなく、死に抗いたいわけでもなく、ただ日常生活の中で、適度なセンチメントとは別の方法で死者と関わり続けることは、この現在の世界状況でも可能だろうと思う。

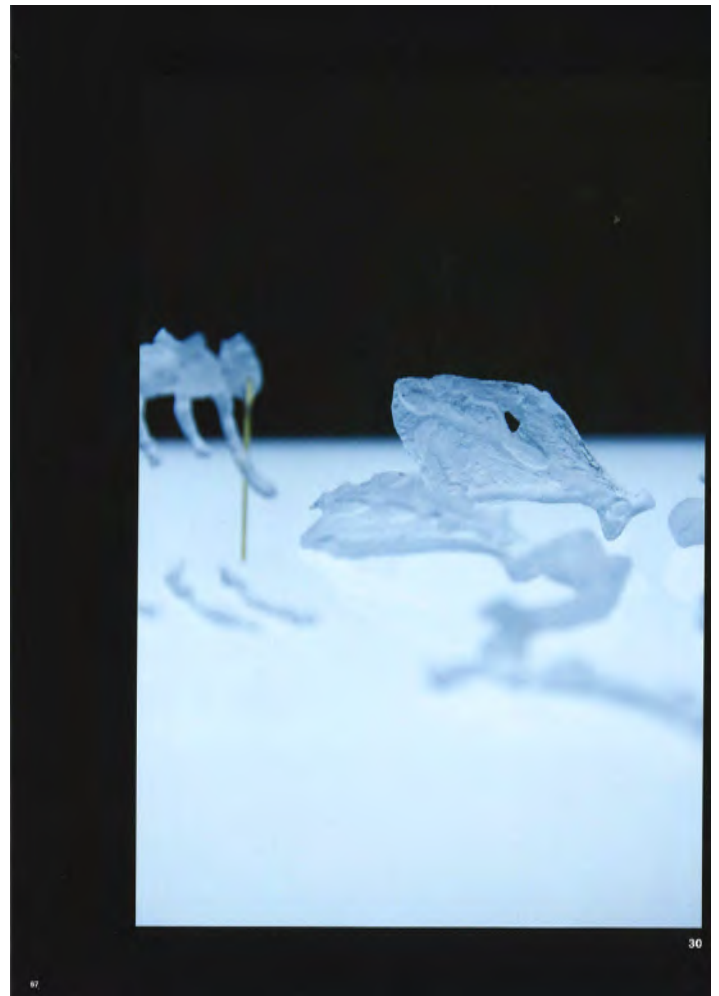
変身した生物や亡くなった存在など、今ここにいない存在について制作を続けてきたが、私が関わりたい不在の存在を総称するような名前をつけられないだろうかと考えている。重さのない、愛のない、形のない、目に見えない、隠れた、透明な、様々な言葉をつけることができそうではあるが、どうしてもこれという名前が決まらないうまま、今も制作を続けている。



24

95





カタログ

書籍名：アーティスト・イン・ミュージアム Vol.1-Vol.10 [2016-2021] 記録集

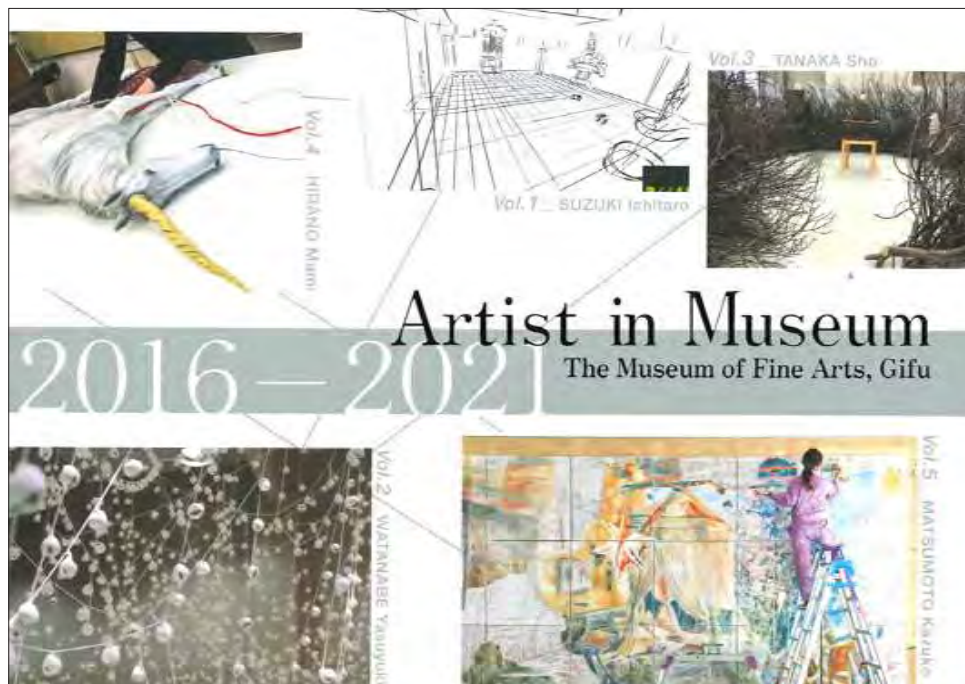
発行月：2022年3月

発行元：岐阜県美術館

概要：岐阜県美術館で開催されたアーティスト・イン・レジデンスの記録集。平成30年8月から岐阜県立岐阜盲学校にて実施した滞在制作および作品展示の様子を掲載。

総頁数80頁。本人担当部分28頁-33頁。

<表紙>



<掲載面>

Vol.4

平野真美 HIRANO Mami

平野真美は、闘病する愛犬や、架空の生物であるユニコーンをモチーフに、実在・非実在生物の身体を構成する骨や内臓、筋肉や皮膚などあらゆる要素を形質転換させる制作を中心とし、一貫して生命の保存と蘇生、変化と不変に向き合う。

2018年秋から岐阜県美術館は改修工事のために1年間の休館に入り、AiMは「アーティスト・イン・ミュージアム Meets」として県内の教育機関や公共施設を会場として美術館外で開催することとなった。その第1回の会場として岐阜県立岐阜盲学校が選ばれた。平野は、AiM制作期間前の2018年1月から積極的に盲学校を訪れ、学校生活の中で児童生徒とコミュニケーションを図り、一人ひとりの個性や特徴を感じ取り、視覚に縛られない世界への理解を深めていった。

学校が夏休みとなる7月下旬からは、図工室をアトリエにして《蘇生するユニコーン》の制作に入った。公開制作では図工室を一般公開し、ユニコーンの胃や腸など内臓部分の制作を行った。また来場者と交流し、ユニコーンの制作に対する想いを伝えた。

2学期には、児童生徒に2度の図画工作、美術の授業を行った。最初の授業では平野の作品を親たり触れたりして鑑賞し、そこから受け取ったものを粘土で造形したり、作文にしたりと自分の表現に昇華させた。次の授業では、小学部から高等部までの児童生徒と一緒に共同制作を

行った。平野が「架空のいきもの」の骨格をつくり、それに児童生徒が着色したり、内臓をつくったり、いきものが何を食べるか等の特徴や性質などのアイデアを出して、一体のいきものをつくり上げた。その作品は、盲学校の多目的室と県美術館のホールにて展示した。

平野は、盲学校での滞在制作と公開を通し、「そこにあるのに見えない世界」への考察を深め、「喪失」を抱き続けてきた制作に、転生や変身が付加されていくこととなった。

アーティスト・イン・ミュージアム
平野真美 Meets 岐阜県立岐阜盲学校

公開制作 2018. 8/20(月)～8/24(金)
作品展示 ①2018. 9/26(水)～9/28(金)
②2018. 10/27(土)・10/28(日)
③2018. 10/30(火)～11/3(土・祝)

会場 【公開制作】岐阜県立岐阜盲学校 図工室
【作品展示①】岐阜県立岐阜盲学校 ふれあいホール
【作品展示②】岐阜県立岐阜盲学校 多目的室
【作品展示③】岐阜県美術館 ホール

観覧者数 1615人
主催 岐阜県立岐阜盲学校
後援 岐阜県教育委員会

ZB12018_5v4 #HIRANO Mami



2018_Vol.4 HIRANO Mami | 29



児童生徒との共作



2018_Vol.4 HIRANO Mami | 31

Artist Commentary

最初に岐阜県立岐阜盲学校へ訪れたのは、公開制作が始まる前の2018年1月終わりだった。図工室の棚には沢山の生徒作品が置かれていて、長細くした粘土を集めたような、白い釉薬が施された陶芸作品を見ると、図工・美術科の先生が「それは太陽だよ」と教えてくれた。「もうひとつ太陽あるよ」と先生が指差した作品は、同じく長細くした粘土をしっかりと丸くまとめたような陶芸作品で、全盲の2人の生徒がそれぞれ作ったものだという。私がイメージする二次元的な太陽とは違う、恒星としての太陽そのものようで、私は今まで太陽の何を見ていたんだろうと驚いてしまった。

それからは盲学校に通う皆のことをよく知りたくて、公開制作が始まるまでいろんな学年の授業に潜り込ませてもらった。休み時間は一緒に遊び、給食を食べ、専攻科では鍼を打ってもらったりもした。特に図工・美術や国語では、ひとりひとりが類稀な世界観を持っているのがよく分かり（これはすべての子どもに言えることだが）、その作品に驚くたび私の中で「障がい」という言葉への違和感が募っていった。少なくとも皆が「障がいを持っている」とはとても思えず、むしろ今の社会が健常



盲学校生徒の作品



者向けに作られているから健常者は障がいなく生活できているだけなのだった。障がいというのは個人の持ち物ではないのに、社会によって誰が障がいを持たされるか一方的に決められているような感じがした。

その頃には皆のことは作家だと思っていたので、作家同士がお互いの作品を見て影響を受けあうように、公開制作では図工室に「蘇生するユニコーン」を持ち込んで、作品に触ってもらいながら、その経験を絵や言葉や粘土で形にしてもらった。例えばユニコーンを触るのを怖がり角まで触ることができなかった生徒の絵には角はなかったが、その本人にしか描けない可愛らしさが溢れた絵になった。その後図工室にある素材を使い、皆で考えた生物を骨格から作ることにした。翌年開催された「セカンド・フラッシュ」展では、その生物とユニコーンとともにリルケの詩を展示した。この詩は盲学校の皆へ贈るつもりだったが、例えまなくとも彼らの中に既にあるものだとも思う。「ここで何ができたか」という悩みは今も続いているが、「セカンド・フラッシュ」展で図工・美術科担当の嘉本先生より寄稿いただいた「AiMを通して児童生徒はこんなことができた」という文章は今も宝物のように思っている。

平野真美



Events

ナンヤローネ ワークショップ
《蘇生するユニコーン》と物語る

2018. 7/22 (日) 10:00~12:00/13:00~15:00 *随時参加
会場 岐阜県美術館 多目的ホール
講師 平野真美

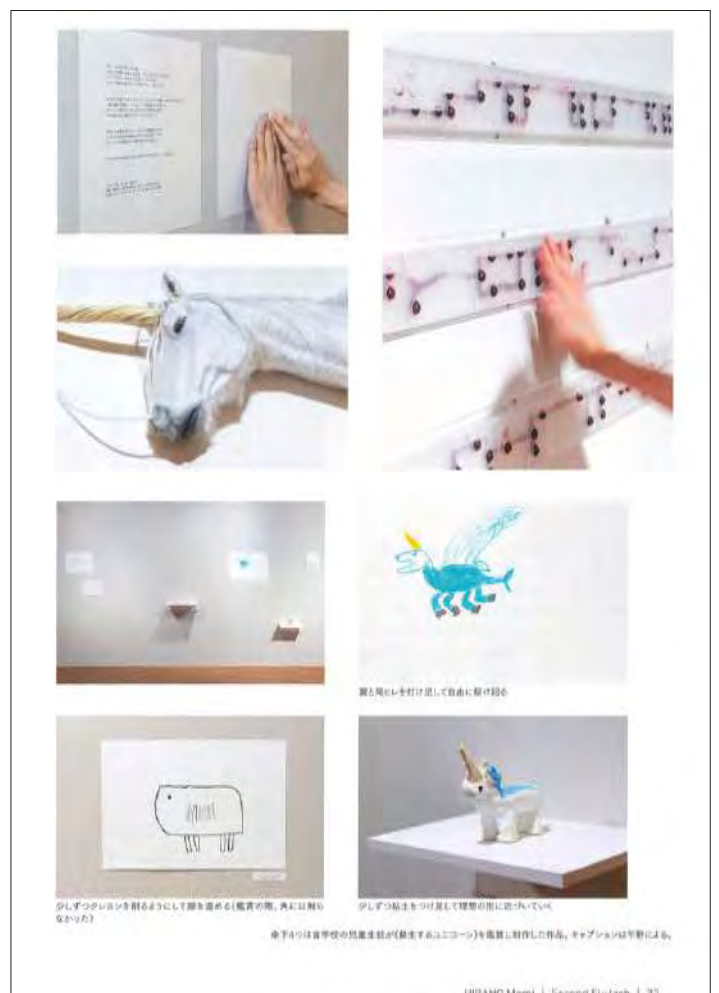
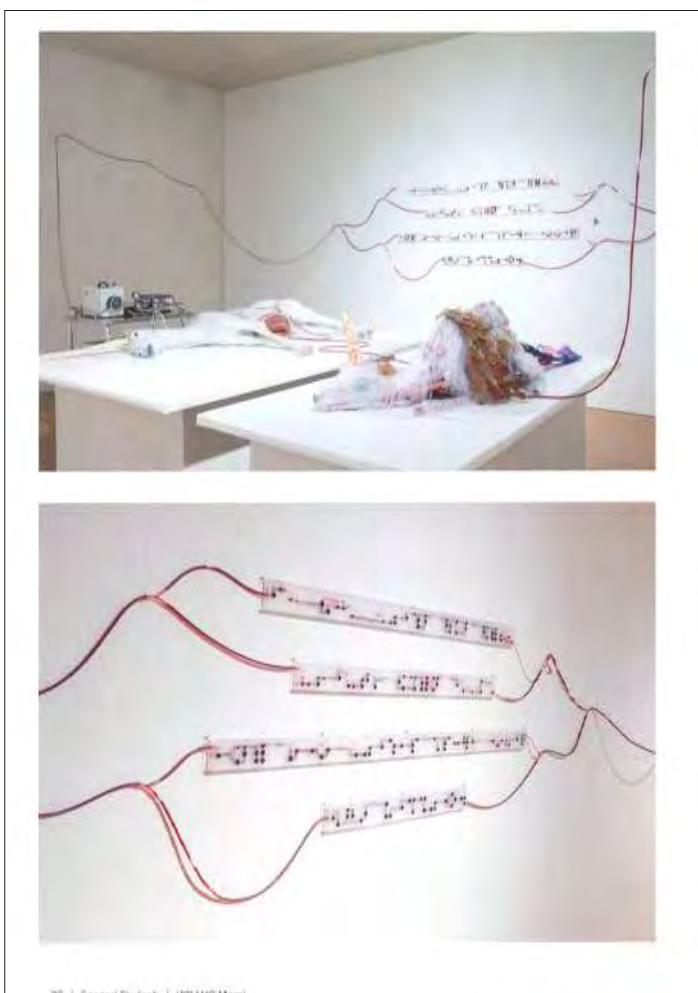
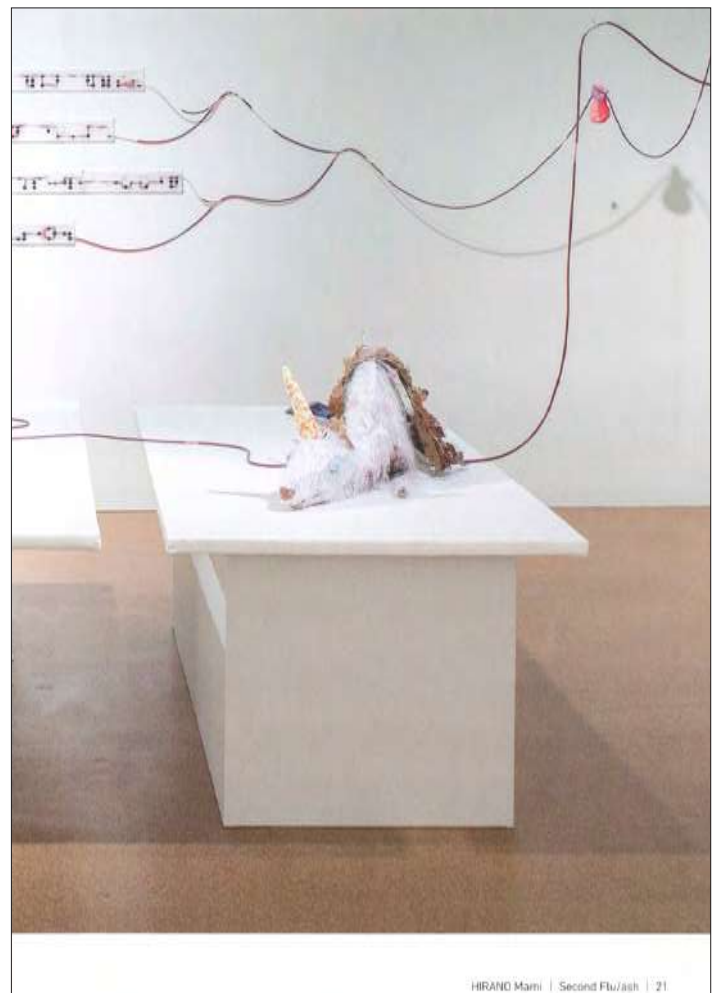
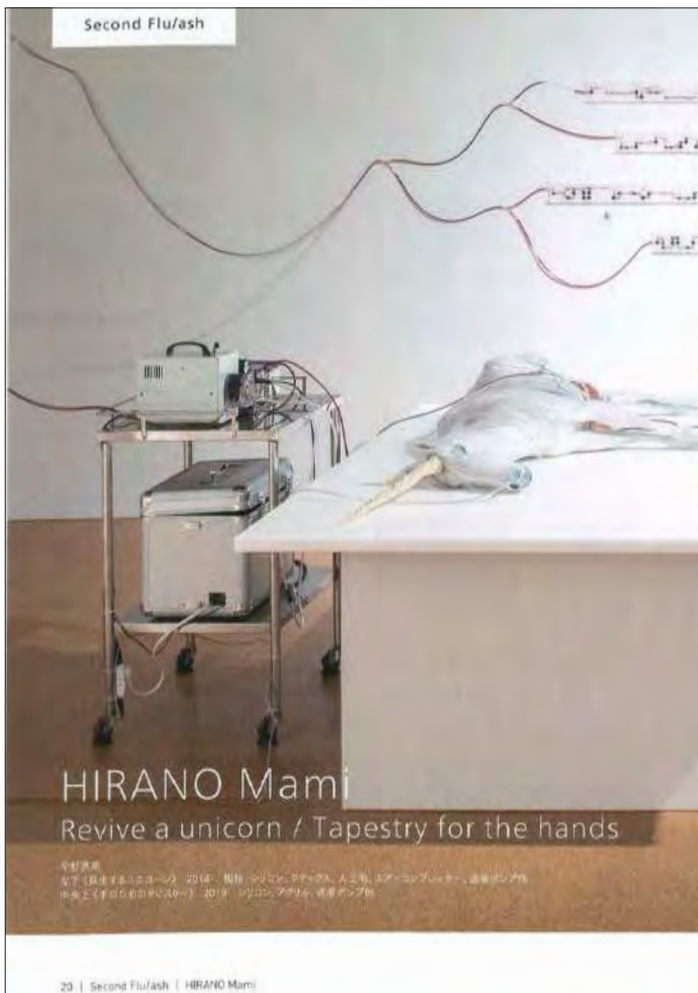
岐阜県立岐阜盲学校オープンキャンパス

2018. 8/4 (土) 9:30~13:00
会場 岐阜県立岐阜盲学校 園工室
講師 平野真美
*《蘇生するユニコーン》の公開制作



Biography

- 1989 静岡県生まれ
- 2014 東京藝術大学大学院美術研究科修士課程
先端芸術表現専攻修了
- 2018 平野真美個展 蘇生するユニコーン (ギャラリー・マルヒ、東京)*
2018年のフランケンシュタイン バイオアートにみる
芸術と科学と社会のいま (EYE OF GYRE、東京)
アーティスト・イン・ミュージアム 平野真美 Meets 岐
阜県立岐阜盲学校 (岐阜県美術館主催)*
- 2019 メディアコスモス新春美術館 2019 色即是空
(みんなの森ぎふメディアコスモス)
セカンド・フラッシュ (岐阜県美術館)
- 2021 3331 GALLERY #041 3331 ART FAIR recommended
artists 平野真美 個展「変身物語 METAMORPHOSES」
(3331 Arts Chiyoda、東京)*
ab-sence/ac-ceptance 不在の観測 (岐阜県美術館)
Collector's Collective Vol.5 (biscuit gallery、東京)
- * 個展



平野真美×ナンヤローネ アートツアー 信頼できない語り手

「ナンヤローネ アートツアー」とは？

アートコミュニケーション作品《Such Such Such》の手法を取り入れた鑑賞プログラム。作品を鑑賞した時に感じたことを様々な方法で表現したり、参加者同士で交流することで、多様な作品のみかた、感じ方を楽しめます。

今回は平野真美さんが、「信頼できない語り手」をテーマにアートツアーを企画。4つの作品にまつわる架空の設定や物語を想像し、それを共有することで、展覧会で前提とされている作家紹介・作品解説に頼らない、自らの想像力を飛翔させた鑑賞へとつなげました。



信頼できない語り手

(Unreliable narrator) とは

小説などで用いられる手法であり、前提条件として提示される文章や設定は無批判に鵜呑みにしていいという認識を逆手にとった叙述トリック。語り手が語る内容が実は真実と異なり、読者を惑わせミスリードする。



註1: 小説という形式自体が持つ暗黙の前提や、偏見を利用したトリック。

アートツアーでは、この叙述トリックを美術館のフォーマットへ置き換えてみます。作家は主観で話すため、作品にとって一番の「信頼できない語り手」であるといえます。では、展示室にある、挨拶文やハンドアウトが「信頼できない語り手」によるものとしたら？ “人間は日常的に触れる情報のうち8割を視覚から得ている”といえます。8割のうち作品にとっての真実をどれほど受け取れているでしょうか

平野真美

ハンドアウトについて



1. 展覧会会場で配布しているハンドアウト(解説などが書かれた印刷物)のフォーマットに、アートツアーの参加者が想像した架空の設定や物語を書き込み、オリジナルハンドアウトを作成します。
2. ツアー後半は、グループ同士でハンドアウトを交換し、他のグループが作成したハンドアウトを見ながら作品を鑑賞しました。

ハンドアウトに書かれた内容(抜粋)



1. このさくひんは「いのちの道」。車が生まれる前、母親のお腹に入る前にこの道を通る。この道で18個のことを学んでお腹に入り、車として生まれる。
2. 作者は男性。再生、人体をテーマに作品を制作していたが、批判を受けて、ユニコーンの制作に切り替えた。ユニコーン作品は評価を得て、それ以降作者はユニコーン作品に注力するようになった。作者は手先が器用だったが、ある時障がいを

- 負い、思うように制作できなくなっていく。それでも作者はユニコーン作品を制作し続けた。壁に展示されているのは、晩年の作品である。
3. 「巨人のお絵描き」。10mの巨人が裸で水浴している姿。地中海の地図を合体させている。
4. 題名は《お花し畑》です。山にすむ鳥「ぎ」と「ふ」は文字を作っている。山には沢山の葉があり花にお話の花が咲く。